



# SYNTHESIS 2014

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 2014



## INDEX

---

01	研究所概要	01
02	月例研究報告	09
03	ランゲージラウンジ活動報告	21
04	研究プロジェクト	27
05	公開講座報告	43
06	研究業績	83



01

---

研究所概要

01

# 2014年度教養教育センター付属研究所概要

## I. 組織

### ◆研究所運営委員会執行部

所長：嶋田彩司

主任：三角明子 福山勝也

研究部門運営委員：大森洋子 黒川貞生

### ◆研究所所員

池上康夫 石渡周二 猪瀬浩平 植木献 上野寛子 大森洋子 亀ヶ谷純一 金珍娥 黒川貞生

嶋田彩司 鈴木義久 高木久夫 高桑光徳 武光誠 張宏波 鄭栄桓 永野茂洋 名須川学

仁科恭徳 原宏之 原田勝広 福山勝也 三角明子 森田恭光 寄川条路 渡辺祐子

Grimes-MacLellan, D.M. Varden, J. K. 土屋博嗣 土屋陽祐 齋藤里美 濱野早紀

### ◆研究員

可部州彦 松山建作 柴田美香

### ◆研究所運営委員会 (\* = 代表者)

・『SYNTHESIS』(年報)担当：\*嶋田彩司 三角明子 福山勝也

## II. 研究活動

### 1. 研究プロジェクト (\* = 代表者)

#### ◆様々な運動環境が青少年の防衛体力・身体に及ぼす影響

\*森田恭光 福山勝也 越智英輔

#### ◆「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義

\*三角明子 植木献 上野寛子 猪瀬浩平

#### ◆股関節内転筋力発揮が大腿四頭筋各筋の活動に及ぼす影響

\*黒川貞生 亀ヶ谷純一 佐久間淳 杉崎範英

#### ◆文化理解とコミュニケーション能力向上のためのスペイン語教育の試み

\*大森洋子 原田勝広

#### ◆明治学院における日本の朝鮮統治期留学生の活動に関する再評価

\*嶋田彩司 池上康夫 徐正敏 鄭栄桓 渡辺祐子

#### ◆大学共通科目におけるEFL教育へのテクノロジーの応用

\*VARDEN, J. K. Grimes-MacLellan, D. M.

## 2. 研究報告会

日付	報告者	テーマ
第一回 (6/11)	高 桑 光 徳	日本の英語教育事情
第二回 (10/8)	森 田 恭 光	スポーツ活動と熱中症の現状
第三回 (11/12)	渡 辺 祐 子	私の見た中国キリスト教会
第四回 (12/10)	武 光 誠	大和朝廷成立への歩み

## Ⅲ. 教育活動

### 《学内語学試験》

	校舎	日付	受験者数	受験者合計
TOEIC IP試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 18 (水)	60名	134名
	白金	6 / 21 (土)	74名	
〈第二回〉	横浜	10 / 15 (水)	78名	172名
	白金	10 / 18 (土)	94名	
〈第三回〉	横浜	12 / 17 (水)	86名	185名
	白金	12 / 13 (土)	99名	
TOEFL ITP試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 25 (水)	94名	191名
〈第二回〉	横浜	10 / 1 (水)	97名	

### 《講座》

#### ◆短期講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間 (コマ数)	講師	受講者数
夏季DELE試験準備講座 〈文法・語彙編〉	白金	10:00 ~ 13:00	9 / 8 ~ 112 (全10コマ)	仲道慎治氏	11名
夏季DELE試験準備講座 〈実践編〉	白金	14:00 ~ 17:00	9 / 8 ~ 12 (全10コマ)	Eugenio del Prado氏	9名
春季DELE試験準備講座 〈文法・語彙編〉	白金	10:00 ~ 13:00	3 / 9 ~ 13 (全10コマ)	仲道慎治氏	12名

春季DELE試験準備講座 〈実践編〉	白金	14:00～17:00	3/9～13 (全10コマ)	Eugenio del Prado氏	9名
手話特別講座	白金	3・4限	3/9～13 (全10コマ)	荒木泉氏 川島絹代氏	入門編：25名 実践編：11名
ドイツ語技能検定試験 4級対策講座	横浜	水5	10/1～11/ 19 (全8コマ)	佐藤修司氏	13名

## ◆通年講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間 (コマ数)	講師
DELE準備講座	白金	水5	4/9～1/7 (全29コマ)	Eugenio del Prado氏
ハングル能力検定試験 対策講座 (5級・4級)	横浜	火4	4/15～1/13 (全29コマ)	朴美恵氏
ハングル能力検定試験 対策講座 (3級・4級)	白金	火4	4/15～1/13 (全27コマ)	李善姫氏
中国語コミュニケーション・ 検定試験講座 (4級)	白金	火4	4/8～1/13 (全30コマ)	鈴木健太郎氏
中国語コミュニケーション・ 検定試験講座 (3級)	白金	火3	4/8～1/13 (全30コマ)	鈴木健太郎氏
中国語コミュニケーション・ 検定試験講座 (4級)	横浜	水3	4/9～1/7 (全30コマ)	黄宇暁氏
ドイツ語3級検定講座	白金	木5	4/10～1/15 (全28コマ)	小山田豊氏

## ◆TOEIC講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間 (コマ数)	講師	受講者数
〈試験対策講座〉 春学期	白金	土3・4	6/7～7/5 (全10コマ)	長谷川剛氏	23名
〈試験対策講座〉 秋学期	白金	土3・4	11/8～12/6 (全10コマ)	長谷川剛氏	26名
〈夏季集中特訓講座〉 基礎コース	横浜	2・3	8/25～9/2 (全14コマ)	中村道生氏	13名
〈夏季集中特訓講座〉 実践コース	白金	2・3	8/25～9/2 (全14コマ)	長谷川剛氏	14名
〈春季集中特訓講座〉 基礎コース	横浜	2・3	2/12～20 (全14コマ)	中村道生氏	14名
〈春季集中特訓講座〉 実践コース	白金	2・3	3/5～13 (全14コマ)	長谷川剛氏	21名

## IV. その他

### 《大学公開講座》

#### ◆アナザーストーリー 明治学院の150年 外伝

	日付	講演テーマ	講演者
第1回	10 / 11	日本人最初の海外伝道者・乗松雅休	信長 正義 氏 日韓関係史研究「むくげの会」会員
第2回	10 / 18	韓国近代文学の祖・李光洙	波田野 節子 氏 新潟県立大学名誉教授
第3回	10 / 25	教育と伝道の使者 —S・R・ブラウン博士—	中島 耕二 氏 明治学院大学教養教育センター客員教授
第4回	11 / 1	井深梶之助が目指したもの —理想と現実のはざまで—	渡辺 祐子 氏 明治学院大学教養教育センター教授
第5回	11/8	明治学院校歌と島崎藤村 —1906年の緑葉—	嶋田 彩司 氏 明治学院大学教養教育センター教授

### 《刊行物》

・明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 『SYNTHESIS 2014』 3月発行



## 2014年度 教養教育センター附属研究所主催 語学講座 一覧

	DELE試験 準備講座	夏季DELE試験 準備講座 〇〇編 (初級以上)	春季DELE試験 準備講座 〇〇編 (初級)	ドイツ語検定講座 (3級)	ドイツ語検定 講座 (4級)
実施期間	通年	夏季休暇中 (短期集中)	春季休暇中 (短期集中)	通年	秋学期 (短期集中)
実施期間	4 / 9 ~ 1 / 7	9 / 8 ~ 12	2015 / 3 / 9 ~ 13	4 / 10 ~ 1 / 15	10 / 1 ~ 11 / 19
校舎	白金	白金	白金	白金	横浜
曜時限	水曜5限	文 10 ~ 13時 実 14 ~ 17時	文 10 ~ 13時 実 14 ~ 17時	木曜5限	水曜5限
回数	授業回数と同じ	各10コマ (2コマ×5日)	各10コマ (2コマ×5日)	授業回数と同じ	全8回 (11 / 19まで)
講師	Eugenio del Prado	文 仲道 慎治 実 Eugenio del Prado	文 仲道 慎治 実 Eugenio del Prado	小山田 豊	佐藤 修司
募集人数	30名程度	30名程度	30名程度	20名程度	20名程度
エントリ者数	春9名	文法編 11名 実践編 9名	文法編 12名 実践編 9名	1名	13名
2014年度 毎月 出席者数 (名)	4月 (4・4・3・2) 5月 (2・2・2・2) 6月 (2・2・2・2) 7月 (2・2・2) 9月 (2) 10月 (2・2・2) 11月 (2・2・2・2) 12月 (2・2・2) 1月 (2)			4月 (1・1・1) 5月 (1・1・1・1・1) 6月 (1・1・1・1・1) 7月 (1・1) 9月 (0) 10月 (1・2・2) 11月 (2・2・1・1) 12月 (1・1・1) 1月 (1)	

2014年度教養教育センター附属研究所概要

韓国語ハングル能力 検定試験対策講座 (前期5級/ 後期4級)	韓国語ハングル能力 検定試験対策講座 (3・4級)	中国語検定試験 講座 (4級)	中国語検定試験 講座 (3級)	中国語検定試験 講座 (4級)	手話特別講座
通年	通年	通年	通年	通年	春季休暇中 (短期集中)
4 / 15 ~ 1 / 13	4 / 15 ~ 1 / 13	4 / 8 ~ 1 / 13	4 / 8 ~ 1 / 13	4 / 9 ~ 1 / 7	2015 / 3 / 9 ~ 13
横浜	白金	白金	白金	横浜	白金
火曜4限	火曜4限	火曜4限	火曜3限	水曜3限	3・4限
授業回数と同じ	授業回数と同じ	授業回数と同じ	授業回数と同じ	授業回数と同じ	全10回
朴美恵	李善姫	鈴木健太郎	鈴木健太郎	黄宇暁	荒木泉 川島絹代
30名程度	20名程度	20名程度	20名程度	20名程度	各30名程度
初回出席者 3名	初回出席者 6名	春2名	春7名	春3名	入門 25名 実践 11名
4月 (3・2・2) 5月 (2・3・2・2) 6月 (2・2・2・1) 7月 (2・2・2) 9月 (1・0) 10月 (1・1・1) 11月 (1・0・1) 12月 (1・1・1・0) 1月 (0・1)	4月 (6・5・5) 5月 (4・6・5・5) 6月 (5・4・5) 7月 (5・5・5) 9月 (2・4) 10月 (6・5) 11月 (2・0・2) 12月 (2・1・1・0) 1月 (1・1)	4月 (2・3・5・4) 5月 (2・2・2・2) 6月 (2・2・2・1) 7月 (2・2・1) 9月 (0・1) 10月 (1・1・1) 11月 (1・1・0) 12月 (1・0・0・0) 1月 (0・0)	4月 (4・3・2・1) 5月 (1・0・1・0) 6月 (1・1・1・1) 7月 (1・0・1) 9月 (3・2) 10月 (2・2・1) 11月 (1・1・1) 12月 (1・1・0・0) 1月 (0・0)	4月 (2・2・3・2) 5月 (2・2・2・2) 6月 (2・2・1・2) 7月 (1・2・2) 9月 (0) 10月 (2・1・1) 11月 (1・1・1・1) 12月 (1・1・1・1) 1月 (1)	



02

---

月例研究報告

02

## 日本の英語教育事情

高桑 光徳

2011年度より小学5年生から週に1時間の外国語活動が始まり、実質的な小学校での英語教育が開始された。さらに将来的には、外国語活動は3年生に繰り下げられ、5年生からは英語という教科化される方向である。このように、日本国内では英語教育の早期化傾向がますます強まり、これまで以上に英語学習に対する関心が高まっているといえる。さらに注目すべきことは、日本の公立学校における初等・中等教育では、外国語教育といえば実質的には英語教育を意味していることである。学習指導要領を見れば分かることであるが、「外国語活動」や「外国語」という名称が、実際には「英語」を指しているのである。

この背景には、マスメディアでしばしば取り上げられるように、「グローバル化」時代には英語が必要であるとか、企業においても英語力が求められるといった言説が流されていることがあげられるであろう。特に、英語の早期教育化推進は、財界からの強い要請を受けたものであると考えられている。多くの場合、中学校・高等学校の計6年間も英語を学習しているのに英語の力がついていない（時には大学の4年間も合わせて10年間という数字が一人歩きする場合もある）、だから小学校から英語を始めた方が良く、という文脈で英語教育の早期化が叫ばれている。しかし、この「6年間」とか「10年間」という数字は、実は正確な英語学習時間数を表している訳ではないことに留意すべきである（金谷, 2008）。

そもそも「グローバル化」という言葉をどう定義するのか、という議論はされず、一部の人たちによる「グローバル化＝英語」という思い込みで施策がなされているのではないであろうか。確かに、英語という言語が、現在世界で最も影響力のある言語のひとつであることは否定できない。例えば、あくまでも推計値であり、またその数も一定ではないが、英語を第一言語とする話者だけでなく、第二言語や外国語として英語を学習する人たちを含めれば、現在英語を理解する人たちは世界でおよそ10億人から20億人存在すると言われている。仮に多い方の数字である20億人という数字を見た場合、ひとつの言語を理解する人の数としては、世界最大と言えるであろう。

一方、世界の人口を約70億人とすると、英語を理解しない人が世界に少なくとも50億人程度はいるということもまた事実である。他の外国語を学ばずに、英語教育にだけ特化するということは、実はこの残りの50億人とのコミュニケーションの機会を失うことにもなりかねない。つまり、「グローバル化＝英語」という発想では、全世界的なつながりを持つ可能性を自ら狭めてしまう危険性をはらんでいるのである。

また、これからは英語を公用語とする企業が増えるために、企業でも英語が必要であるという意見もマスメディアでは目にする事が多い。英語を公用語としていることで広く知られている会社としては、(株)ファーストリテイリング、日産自動車(株)、楽天(株)が挙げられるであろう。このうち、ファーストリテイリングは、資本金102億7,395万円(2014年10月9日現在)で、社員数(連結ベース)30,448名(2014年8月末現在)である(ファーストリテイリング, 2014)。日産自動車は、資本金6,058億1,300万円で、従業員数23,085名(単独ベース)、142,925名(連結ベース)である(2014年3月末現在)(日

産自動車, 2014)。楽天は、資本金1,095億3,000万円（2013年12月末現在）で、従業員数が3,762名（単独ベース）、10,867名（連結ベース）（2013年12月末現在）である（楽天, n.d.）。もちろん、これらの企業以外にも英語を公用語としている企業もあれば、公用語としていなくても、日常的な業務として英語を使用している企業もある。一方で、上記のように、英語を公用語としている企業であっても、すべての従業員が日常的に英語を使用しているわけではないことにも留意すべきである。

さて、ここで考えたいのは、こうした英語を公用語とする企業や、日常的に英語に携わる部門がある企業に、いったいどれくらいの割合の人が就業しているのか、ということである。企業の規模としてはそれぞれが大きいため、従業員数を見れば多くの人が所属している印象を受けるかもしれない。しかし、労働力調査（総務省統計局, 2014）によれば、2014年11月現在の就業者数は6,371万人であり、上述の英語を公用語としている企業で働く従業員数の割合は、決して多くはないことが分かるであろう。また、英語教育を受けた人全体を考えれば、就業者だけでなく非労働力人口を合わせた人口全体を考慮する必要がある。15歳以上人口は1億1,085万人であり、このうち15~64歳までの人口は7,767万人となっている（総務省統計局, 2014）。これらの数字を考え合わせれば、英語を公用語としている企業で働く従業員数の割合は、英語教育を受けた人全体から見ればそれほど多くないことが分かる。

また、上述の3社は、中小企業基本法の定義からも、法人税法による定義からも、中小企業の範疇に入らない大企業である（経済産業省中小企業庁, 2013）。こうした大企業は、日常生活においてはニュースや広告でその名前を聞くことが多く、数多く存在しているような印象を受けるかもしれない。しかし実際には、企業数全体の0.3%を占めるに過ぎない。つまり、日本の企業数全体のうち、99.7%を占めるのは中小企業である（経済産業省中小企業庁, 2013）。したがって、上述のような大企業で働く従業員数が割合として多くないのはそれほど不思議なことではないのである。

以上のように、「グローバル化」時代には英語が必要であるとか、企業においても英語力が求められるといった言説は、日本の英語教育の早期化を推進するのに十分な根拠になっていないことは明らかである。多くの日本人が日常的に英語を使うことができない、あるいはできないと思い込んでいることの大きな要因のひとつは、日常生活において英語を使う必要がないことである。現状では、日常生活においても、仕事においても、英語を必要とする人の割合はそれほど多くはない（Terasawa, 2011）。この点を考慮せずに単に英語の必要性を訴えても、これまでと同じように大きな成果は期待できないであろう。少なくとも早い時期から選択科目としてではなく、小学生全員に英語を必修化するということは、英語が得意な生徒を増やすことが期待できる反面、その裏返して英語嫌いの生徒が増えてしまう危険性もある。英語教育の早期化推進は文部科学省の施策の既定路線のようであるが、英語教育を抜本的に改革したいのであれば、そもそも英語教育は必要なのか、必要だとしたらそれはなぜなのか、そして誰にとって必要なのか、またいつ必要なのか、といった根本的な議論を行うことから始める必要がある。

## 参考文献

- ファーストリテイリング. (2014). 概況 | FAST RETAILING CO., LTD. (<http://www.fastretailing.com/jp/about/company/>). 2015年1月7日取得.
- 金谷憲. (2008). 英語教育熱 過熱心理を常識で冷ます. 研究社.
- 経済産業省中小企業庁. (2013). 日本の中小企業・小規模事業者政策. (<http://www.chusho.meti.go.jp/soshiki/130808seisaku.pdf>). 2015年1月7日取得.
- 日産自動車. (2014). 日産 | 会社情報 | 会社概要 トップ. (<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PROFILE/>). 2015年1月7日取得.
- 楽天. (n.d.). 楽天株式会社 : 会社概要 | 企業情報. (<http://corp.rakuten.co.jp/about/overview.html>). 2015年1月7日取得.
- 総務省統計局. (2014). 労働力調査 (基本集計) 平成26年(2014年)11月分(速報). (<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/201411.pdf>). 2015年1月7日取得.
- Terasawa, T. (2011). Japanese people's valuation of English skills: Sociometric analysis of JGSS-2010. *JGSS Research Series*, 8, 47-57.

# スポーツ活動と熱中症の現状

森田 恭光

キーワード：スポーツ、熱中症、健康指導

## はじめに

熱中症（熱疲労、熱けいれん、熱失神、熱射病）は暑熱環境暴露と暑熱の状況に対するからだの機能の反応との関係が明確な病態である。現在、暑熱環境の指標としてWet-Bulb Globe Temperature（WBGT:湿球黒球温度）が用いられている。また、黒球温度が測定できない場合、湿球温度や乾球温度からWBGTを推定する方法も推奨され、簡単に環境温度が把握しやすく熱中症予防が個人レベルや集団的アプローチであっても効果的に予防可能となっている。しかし、スポーツ現場の調査や労働場面、日常生活に関する観察においては、地域や気象条件により救急搬送を必要とする熱中症が多発している。近年、政府や地方公共団体、生気象学会、企業等が協力し熱中症予防に関する講演やキャンペーンを実施し、環境温度把握や水分摂取の方法等を推奨している。学校教育に関しても、健康スポーツ科学関連科目において熱中症予防に関する教育がなされ、青少年の時期から暑熱環境における対策は把握されていると思われる。このように、熱中症予防に関して対策が進んできてはいるが、ここ数年、熱中症の発生は増加している。今回は、熱中症死亡状況や学校の状況について報告する。

## 熱中症死亡および救急搬送の状況

熱中症環境保健マニュアルによる1968年～2011年までの運動時熱中症の死亡数年次推移においては、1978年以降の猛暑時に男女とも死亡数が増加し、1994年以降は、夏季気温の上昇により男女とも死亡数が2011年まで増加傾向を示している。年齢階級別の推移については、10代～20代において、運動やスポーツ場面、30代～60代は労働、高齢者においては、日常生活、労働、運動となっている。運動、スポーツに関して学校管理下における種目は、野球、ラグビー、柔道、サッカーが多く見られる。0市における救急搬送の調査においては、学校管理下のみならず様々な運動場面で救急搬送されており、種目としては陸上、野球、サッカーが多く、未成年者の搬送が60%を占めていた。いずれも、参加人数が多い種目であるが、実施する際には、気象状況の把握や水分摂取確保、休憩時間など、練習や試合等を含めすべての運動、スポーツ場面において熱中症予防対策をさらに充実させ発生を防ぐことが必要である。

## 学生の現状

近年、熱中症の発生に関しては、運動・スポーツ活動調査および報道等により学校管理下における熱中症事故も相次いで報告されているが、これらの実態について明確な報告はあまりみられない。実態を把握することは熱中症予防をさらに進めていくために必要と思われる。

今回、スポーツ活動および運動時の熱中症罹患経験と発生の特徴について調査する機会が得られ



たので、実態についてまとめ、熱中症の予防や対応策について検討したので報告する。

対象は本学学生770名（男子390名、女子380名）に関して熱中症の罹患状況についてアンケート調査を行った。内容は部活名（サークル含む）、熱中症罹患経験の有無、症状の内容（日本救急医学会で用いられている指標）、罹患状況（学年、日時、場所、種目）である。

罹患率は、1回目男子19.0%、女子16.5%、2回以上男子4.0%、女子4.2%、3回以上は顕著に減少していた。罹患時の症状は、男女とも、重症度Ⅰ（めまい、立ちくらみ、こむらかえり等）、重症度Ⅱ（頭痛、吐き気、体がだるい等）が90%であった。罹患経験は男子が女子に比べ高かった。学年別熱中症の罹患経験数は、男女とも中学校2年次と高校2年次がもっとも高かった。次に高校3年次と大学1年次であった。学年別においては、中学2年次および高校2年次は、クラブ活動においていずれの学年も中心的に活躍する時期であるためと考えられる。種目別では、男子が野球、サッカー、陸上、女子は、テニス、バレーボール、陸上の順であり、屋内および屋外を問わず発生していた。月別の罹患件数は、男女とも8月がもっとも多く、ついで7月、9月の順であった。件数は少ないが、5月、11月にも発生していた。発生した時刻、場所をもとに気象庁からの資料を参考に発生した気温と湿度の関係を調べた結果、湿度40%、気温20℃以上で多発していた。熱中症予防運動指針から見ると気温20℃および湿度40%領域は安全域であるが水分補給や運動の強度、実施時間および休息时间等に十分を考慮しないと熱中症に陥る危険があることが判明した。

今回の調査から学校管理下における運動・スポーツの実施に関しては、練習や試合および合宿ならびにイベント等における演技発表会等あらゆる場面において、気温、湿度、風速、黒球温からWBGTを測定し、水分補給や運動強度、実施時間、休息时间、体調管理等の方法を学生や指導者にさらに浸透させ、各スポーツ特性に応じた現実的な予防策を考案していくことが重要であると思われる。

## 参考文献

熱中症環境保健マニュアル：環境省環境保健部環境安全課, 2011年5月改定版.

熱中症予防の現状と課題：日本スポーツ健康科学学会第2回大会, 2014,p8.

スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック：日本体育協会, 2013.

# 私が見た中国キリスト教会

渡辺 祐子

## はじめに

昨年8月から12月にかけて、大連、武漢、南京、上海、香港に滞在。その間以下の4種のキリスト教会の礼拝に出席。

- ①公認教会（三自愛国教会＝登記教会。武漢、南京、上海）
- ②公認されている外国人礼拝（大連、武漢、上海。中国人の出席は許されていない。香港、台湾人はOK）
- ③家庭教会（山東省濰坊。エリック・リデルが収容されていた元日本軍集中營を見学した際。訪問のみ）
- ④もと家庭教会。登記したばかりの教会（武漢市洪山教会。武漢滞在中はほぼ毎週通う）

## 中国のキリスト教概況

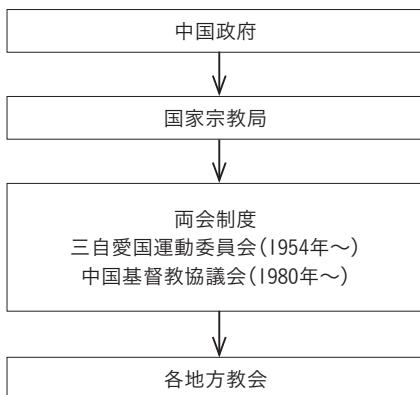
中国社会科学院年次報告書（『宗教青書』2010年）：プロテスタント数2305万人。非公認教会の信徒を含めると最も多く見積もって1億3000万。

パドュー大学社会学教授楊鳳崗：2025年には1.6億人に達し、世界最大のキリスト教国家に。

現在中国の5大宗教、仏教、道教、プロテスタント、カトリック、イスラム教のうち、信徒数が増加し続けているのは、仏教とプロテスタント。そのうちプロテスタントが集中しているのは、河南、浙江、福建、安徽、江蘇。十字架強制撤去で話題の浙江省温州は「中国のエルサレム」と呼ばれ、市内には1000を超す教会堂が建ち、人口の15パーセントがキリスト教徒ともいわれる。今年の2月末以降、浙江省では温州、杭州等各地で二百数十もの十字架が撤去され（8月時点での情報）、一部教会も取り壊された。

## 1. 公認教会(登記教会)について

### 1) 公認教会とは



1950年「中国基督教在新中国建設中努力的途径」いわゆるキリスト教の「革新宣言」。キリスト教指導者が周恩来との3回の会合の未発表。その後この宣言文の半強制的な署名活動が広がる。一部福音派の牧師は断固拒否。  
1954年 「中国基督教三自愛国運動委員会」設置。  
1955年 王明道逮捕。  
1958年 大躍進。教会員数急激に減少。  
  
1979年 上海のプロテスタント教会沐恩堂で礼拝復活  
1980年 中国基督教協議会設立  
1989年 天安門事件

北京市基督教两会、温州基督教两会など、  
全国に24の两会組織がある

## 中国基督教協議会のHPより

「三自愛国運動委員会は中国のキリスト教徒の土着化運動を支え、これを推進するために、自治、自伝、自養の三自を実行し、海外のキリスト教会との服属関係を断ち切り、中国キリスト教の独立を実現する組織である。三自運動は、政府当局の代表を通して中国政府の監督を受け、教会の完全なる中国化を目指すものである。同委員会には政府当局の人間も含まれているので、完全な宗教組織ではなく、半自律的な組織ということになる。また基督教協議会はキリスト教の社会組織で、中国各地の教会相互の横のつながりや協力関係を管轄している。」<http://www.chinesechristianchurch.org.cn/church/church-14.html> (2014/11/6)

「三自教会」は教派ではなく、神学的な教会論、職制もない。Faith and Orderは問題にならない。→「教会」と言えるのか？という根本的な疑問。

### 2) 公認教会をどう評価するか

- ①政府 和偕社会実現への寄与を期待。善良な公民としてのキリスト教徒。
- ②体制内改革派 王艾明（金陵神学院副院長）市民的責任、神の公義の実現を主張。
- ③家庭教会穏健派 守望教会（北京）、秋雨之福教会（成都）
- ④家庭教会急進派 方舟教会（北京） 余傑→アメリカに事実上の亡命。

②と③の境界は極めてあいまいで相互の交流も盛んだが、余傑の共産党批判、三自愛国教会批判が際立っているのがこのように分類してみた。

## 2. 家庭教会について

### 1) いくつかの要点

#### ・「地下教会」にあらず

公に礼拝を守っているので「地下教会」ではない。家庭教会の「公開化」は2006年、北京の家庭教会である守望教会\*が政府に対し登記を求め始めて以来さらに進む。

むろん合法的地位を得ているわけではなく、ある線を超えると公安の取り締まりの対象となる。

#### ・集会所は多種多様

家庭集会、マンションのワンフロア、会堂、野外礼拝を余儀なくされているなど様々

#### ・教会の数、会員数は専門家もつかんでいない

#### ・神学的、階層的にも極めて多様

インテリ中心から労働者中心まで／改革派からエヴァンジェリカルまで

・神学教育、教理教育の不統一。限りなく異端、カルトに近い教会もある。

＊基督教北京守望教会：清華大学理学部4年生時に天安門事件に遭遇、それが直接のきっかけとなってキリスト教に入信した金天明（現牧師）が1993年に自宅で家庭礼拝を開始。福音主義改革派教會的教会形成を目指し、教會の社会的責任を重視。政府からは「基督教非合法組織」として扱われ、ウェブサイトの閉鎖、礼拝場所の大家への圧力が原因で引っ越しを余儀なくされるなど様々な妨害を受けている。2009年に2700万円で購入したビルの鍵はいまだに渡されておらず、やむを得ず野外で行っている礼拝もしばしば妨害されている。金牧師は2011年以降自宅軟禁におかれたまま。

## 2) 武漢市洪山福音堂の例

家庭教会から公認教会になったばかりの教会

雰囲気は家庭教会当時のまま。公認教会と明らかに異なる。

福音派的。礼拝はバンドがリード。説教はオーソドックス。贖罪に力点を置く説教。

家庭的。若い層の活動が活発。毎週礼拝後は、青年会や婦人会、壮年会が順番に昼食担当。

礼拝以外の活動がきわめて盛ん。読書会。聖書研究会。讃美歌練習。

国際的 → 台湾人長老が指導する聖書研究会。身分は在外研究者。

朝鮮族の牧師の人脈から韓国人クリスチャンの訪問が絶えず、韓国教会とも交流。

没政治的

・なぜ家庭教会から三自愛国教会になったのか？

伝道が自由にできる

十字架を掲げることができる

三自愛国教会に登録されたことによって自由がなくなると心配する声もあるが、むしろ安心して伝道活動に専念できるメリットの方が大きい。

物件を安定的に賃貸し続けることができる。

## 3) 「六四」（1989年）と家庭教会

公認教会牧師のA氏

北京の家庭教会で牧師を務める友人、香港中文大学で出会った成都秋雨之福教会長老王怡氏

→これら3人の私の友人、知り合いは、天安門事件を機にキリスト教に接近し、召命を受けて牧師となる。（王怡氏は天安門事件25周年にあたる今年の6月4日、いきなり逮捕、拘留された）

#### 4) 教会の社会的責任について

守望教会の金牧師、秋雨之福教会の王怡牧師ら、「改革派」の家庭教会は教会の社会的責任の実践を重視。 貧困問題・留守家庭問題・人工妊娠中絶問題・教育問題など。

\*昨年児童の日、王怡牧師の秋雨之福教会は成都市内で人工中絶に反対するパンフレットを配布。公安に制止され、用意した冊子をすべて押収された。

\*報告者は香港のクリスチャンが出資した不登校児のフリースクール（湖北省）を訪問。

### 3. 香港の位置づけ

#### ①専門的な神学教育の場を提供

大陸の神学教育の水準は低く、ヘブライ語、ギリシア語教育ができる教員スタッフはほんの一握り。多くのインテリが家庭教会に向かうのは、三自愛国教会の学術レベルの問題にもよる。

報告者は昨年度以下の神学研究拠点を訪問した。

##### ・ 建道神学院（アライアンス系）

北京語による短期集中コース。家庭教会からも三自愛国教会からも若い牧師を受け入れている。

ビザの取得が大きな問題。

##### ・ 香港中文大学崇基学院

多くの大陸からの留学生（主に博士課程の学生）を受け入れ、臨機応変に北京語で授業。

##### ・ 中国神学研究院（神学大学院）

家庭教会の牧師による集中講義が毎年行われている。大陸からの留学生も多数。

#### ②大陸の教会の状況、特に家庭教会の状況を知るための情報の拠点

#### おわりに

中国キリスト教の三つの深刻な課題と重い使命

- ・ 低水準の神学教育
- ・ 牧師不足
- ・ 民主化問題

#### 参考資料一覧

余傑『誰為神州理舊疆?』基文社、2010年

王志勇『中国改革與清教徒精神』基文社、2011年

王艾明著 松谷曄介訳『王道 21世紀中国の教会と市民社会のための神学』新教出版社、2012年  
 王再興「現代中国におけるキリスト教」『一神教学際研究』8、同志社大学、2012年  
 鄧穎翹『北京新興家庭教会研究』建道神学院、2013年  
 陳智衡『合一非一律 中華基督教会歴史』建道神学院、2013年  
 「浙江拆十字架風暴」『亞洲週刊』2014年8月17日 第28卷第32期  
 「浙江再拆十字架三自教会分裂」『同』2014年8月31日 第28卷第34期  
<https://www.facebook.com/prayforshouwang>  
<http://www.economist.com/news/briefing/21629218-rapid-spread-christianity-forcing-official-rethink-religion-cracks> (2014/11/2取得)

# 大和朝廷成立への歩み

武光 誠

大和朝廷の誕生は、日本という国をまとめる動きの芽生えといえる重要な画期である。今回は大和朝廷成立より前の、吉備と出雲の重要な遺跡を取り上げて解説した。

紀元前一世紀末の北九州に、有力な遺跡が現れる。それは大陸との貿易で成長した小国と呼ぶべきものである。

それから二百年足らずで、出雲に有力な小国連合が現れた。荒神谷遺跡の358本の銅剣は、小国の首長が集まって祭祀を行ったことを示すものである。

さらにそれから2、30年あとに、吉備の橋築遺跡がつくられた。それは吉備全体の小国の上になつ、有力者を葬ったものとみてよい。

このような吉備の動向を受けて、紀元220年頃に大和朝廷が残したものとされる纏向遺跡がつくられるのである。

このあたりの歴史の詳細は、小著『日本の古代史 本当は何がすごいのか』（育鵬社刊）を参照されたい。

# 03

---

ランゲージラウンジ  
活動報告

03



## 2014年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

## 1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、自習者自らが具体的な目標を設定し、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら学習するプログラムを展開し、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンライン学習の学習補助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

以上のように、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっている。今後は横浜キャンパスのコモンスペースの利用などもチェックし、より効率的な自律学習について適切なアドバイスを行っていくことが課題となろう。

## 2. 活動詳細

## 2.1 英語部門：高桑光徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を一学期間にわたってサポートする Independent Language Study Support Program (ILSSP) と、昼休みに英語による学術的な講義を聴講する Luncheon Lecture Series、そして TOEIC オンラインコースを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきた ILSSP は、今年度も春学期と秋学期の二期にわたり実施した。毎週月曜日の 12:30-15:30 をコーディネーターの山森由美子氏 (本学非常勤講師) が担当し、毎週木曜日の 12:30-15:30 をコーディネーターの坂井誠氏 (本学非常勤講師) が担当した。各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励むことができるように学習支援を行った。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSP実績

実施期間	参加者数
春学期 (5月-7月)	20名 [文学部5、経済学部4、社会学部2、法学部1、国際学部6、心理学部2]
秋学期 (10月-1月)	19名 [文学部1、経済学部6、社会学部2、法学部1、国際学部7、心理学部2]

また、今年度は全5回にわたる Luncheon Lecture Series を開催した。以下の表の通り、春学期に2回、秋学期に3回開催し、両学期ともに外国人教員と日本人教員 (本学非常勤講師) による講演が行わ

れた。トピックは多岐にわたったが、講演者それぞれが入念に準備をし、更にパワーポイントを使用することで、より学生にわかりやすいものになるよう努めた。今年度は、留学のすすめと英語力の向上、特にライティングとプレゼンテーション能力の向上を図ることに重点がおかれたシリーズとなった。ひとつ問題点としてあがったのが、コンピュータの技術面である。講演中、短いビデオや音声ファイルがうまく再生されないということが頻繁に起こった。この点は次年度に向け改善していきたい。

表2 Luncheon Lecture Series 実績

	日付	タイトル	講演者	参加者数
第1回	5/28	Go Abroad!	Tsuyoshi Hasegawa (本学非常勤講師)	125名
第2回	6/30	Less than a Paper, More than a Tweet	Steve Doran (本学非常勤講師)	127名
第3回	10/20	Wolf – An Endangered Apex Predator	M. Trazi Williams (本学非常勤講師)	80名
第4回	11/10	Tips for Academic Writing	Makoto Sakai (本学非常勤講師)	55名
第5回	12/4	Fear Not Presentations	Aviva Ueno (本学非常勤講師)	57名

## 2.2 ドイツ語部門：吉田 真（経済学部）

2014年度ランゲージラウンジ(ドイツ語部門)は「ドイツ語deランチ」と題して、森本康裕氏(本学非常勤講師)が毎週金曜日の昼休みに行った。毎回定期的に参加する学生の人数は年間を通して3～5名程度であった。参加者の多くはドイツ語初級を履修している1年生の学生だったが、オーストリアからの帰国子女が1名、ドイツ語を履修していない学生も2名程度参加していた。

春学期はリスニング練習を行なった。「東京外大言語モジュール」のドイツ語版を利用して、あらかじめ文章を部分的に空欄にしてテキストへと参加者に聴き取ってもらい、映像資料の中で話される重要なフレーズや単語を基礎文法を確認しつつ学んだ。秋学期には春学期の学習の発展篇として、リスニングに加えてドイツ語会話の練習を行なった。インターネットサイトSpiegel TVで閲覧できる映像資料を主に教材として利用し、さまざまなシチュエーション(挨拶、レストランでの注文、自己紹介、質問の仕方等々)を設定した上で、典型的なドイツ語の言い回しや短い文章を考え、それを表現するための練習に取り組んだ。なお、秋学期は基本的にすべてドイツ語のみで講座を行なった。

春秋両学期を通じ、授業時に学んだ基本的なドイツ語文法の復習やその応用を目標とし、参加者

のドイツ語学習へのモチベーションを高めること、なによりもドイツ語の学習を始めたばかりの学生たちが自発的に「ドイツ語で話す」勇気をもてるようになることに講座の主眼を置いた。

### 2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージラウンジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、スペイン文化センターが開設しているAVE (Aula Virtual de Español) への受講によって自律学習を促している。春学期、秋学期に25名程度受講した。この講座では、予め様々な学習教材が用意され、学習者が自由にページにアクセスして学習する方法になっている。その内容、学習者のコミュニケーション能力の向上をめざすためにこのコースを利用するためにはどうしたらよいのか。定期的にコースにアクセスさせるための工夫をどうするかなどが大きな課題である。

### 2.4 中国語部門：張宏波

2014年度の中国語部門「中文会話倶楽部」は、これまでと同じ曜日時間である授業期間中の毎週木曜日に横浜校舎1号館3階で開催した。昨年度に引き続いて、学生と同世代の中国人留学生に運営してもらい、日本人学習者と留学生とが<互学>を展開することで、楽しみながら中国語学習の効果を高める場となることを企図した。参加者は、平均して10人余りであった。

今年度の新たな試みとしては、中国人留学生に加え、初習中国語の学習を終えたばかりの上級生の日本人学生にも運営スタッフに加わってもらったことである。これは、前年度の参加者が次のような感想をもらしていたことを踏まえた対応である。留学生だけでは会話のレベルがやや高くなってしまふところがあり、中国語の学習を始めたばかりの1年生にとっては、よほど積極的な学生でなければ敷居が高く感じるところがあるという。そこで、中国語の入門段階の学習を終えた日本人学生に参加してもらい、中国語および日本語の会話に加わってもらうことで、それほど話せるわけではない学生が他にもいることで安心感を得られる環境作りをすることにした。上級生スタッフには、中国語の学習に熱心で積極的だった学生の中から、「会話倶楽部」に加わることで新しい何かを生み出す「触媒」となる可能性を感じさせるメンバーに声を掛けて選んだ。

また、「会話倶楽部」での交流が昼休みにとどまらない本格的な「繋がり」へと発展するケースも見られた。意気投合した留学生スタッフと日本人参加学生が、「倶楽部」の外でも語学学習をしたり日本文化の体験に出かけたりしているとの報告があった。

社会人学生や中国語を履修していない学生が頻繁に顔を出すようになったのも初めての出来事である。彼ら／彼女らは、「会話倶楽部」が留学生と日本人学生とが文字通り異文化交流する「場」であるという話を聞きつけて顔を出し、その楽しく有意義な雰囲気に魅力を感じて毎回のように参加するようになった。ランゲージラウンジを狭い意味で捉える必要がないことを感じさせる展開と

なっている。

これと関連して、中国文化に触れるイベントも行った。ランチョンレクチャーの一環として京劇役者を春秋2回にわたって招聘し、実演を通じて中国語を交えながら、中国の伝統文化の解説もしてもらった。20数名の参加者があって大変好評であった。

また、中国映画上映会も開催した。留学生同士で会話をするなかで、環境問題や消費のあり方に興味をもつ留学生が、日本人学生と一緒にこの問題を考えようとして、映画会を企画した。不要品の物々交換を通じて人生のあり方を見つめ直していく「台北カフェ・ストーリー」という映画を観た後で意見交換を行い、20名ほどが参加した。

もちろん、本来的な目的での「会話倶楽部」の活用も行われている。高校段階で入門学習を終えているため個別の対応が必要となったある学生は、会話力を高めるために「会話倶楽部」に参加するようになり、検定試験対策の学習チェックも「倶楽部」で行っている。

総じていえば、「会話倶楽部」の雰囲気により多様な学生に対応できるだけの「厚み」を備えつつあるというのが今年度の到達点だった。学生自身を中心に運営していく現在の流れは今後も尊重していきたいと考えている。

## 2.5 韓国語部門：金珍娥

2014年度韓国語ランゲージラウンジにおいては、横浜校舎で以下のような日程と体制で、週1回実施した：

### ●横浜校舎

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期 2014年4月22日～7月15日（毎週火曜日）

秋学期 2014年9月30日～12月23日、2015年1月6日～13日（毎週火曜日）

教 室：明治学院大学横浜校舎 138教室

時 間：12時35分～13時20分

人 数：春学期 5～6人 秋学期 3人

担当講師の高槿旭先生から全体的に以下のようなことが伝えられた：

韓国のドラマとその台本を用いて、話す能力と聞き取る能力の向上を最大の目標として、進めてきた。毎回、映像と台本を用意し、最初は台本なしでドラマ（日本語の字幕付き）を見せて、その内容について話し合い、2回目からは、台本を見ながらドラマの内容を確認、台本の空所のセリフを、聞いて書く練習を中心に行った。

春学期はなるべく簡単な会話が聞き取れるように、台本を用意した。聞き取りが終わった後は、重要な語彙と文法を解説して、ペアで練習し、映像を見ながらシャドーイングを行った。秋学期は上級レベルの学生が来てくれたので、文法の解説などは最小限にして、セリフを聞き取って、話す練習を中心に行った。参加した学生は少なかったものの、韓国語のレベルの高さに感心した。

04

---

研究プロジェクト

04

# 様々な運動環境が 青少年の防衛体力・身体に及ぼす影響

プロジェクトメンバー：森田恭光\*、福山勝也、越智英輔（\*：代表者）

本年度は以下の3つの研究活動を実施した。これらの活動で得られた結果を年度末にかけて競技者および小学生にフィードバックする。

## 1) 女子柔道選手の減量に関する研究の投稿論文作成

4月：形態・体重変化、体力測定、免疫応答、心理的調査の結果をメンバーで分担し、統計処理（平均、標準偏差、一元分散分析）を実施。

5月：各分析データの結果を、メンバーで考察し、論文の構成を検討した

6月：文書化し全体を校正後、学会誌に投稿

8月：学会誌に掲載

## 2) 男子柔道選手の減量の実態調査

5月：調査内容および分析方法打ち合わせ

6月：調査用紙および分析機器準備

9月：減量調査

11月：調査内容分析・フィードバックについて打ち合わせ

## 3) 小学生の形態・体力と肥満危険因子の調査

5月：調査内容および分析方法打ち合わせ

6月・7月：調査および一部調査内容分析

8月：データの一部を日本スポーツ健康学会にて発表

10月：データの追加解析

11月：結果とフィードバックについて打ち合わせ

## 4) 12月：上記測定結果の概要について、各実施対象者に、フィードバックを実施した。

上記のうち、活動1)の成果は、2014年8月に発刊された日本スポーツ健康科学誌に原著論文として掲載された。

# 「教養教育としてのカフェ」研究： カフェ・ネットワークの構築とその意義

プロジェクト長：三角明子 プロジェクトメンバー：植木献、上野寛子、猪瀬浩平

## 猪瀬企画

### 1) 屋台づくりワークショップ

昨年度の本プロジェクトで開催した鳥取大学屋台部講演+ワークショップに参加した学生有志が中心になり、5月4日に屋台制作のワークショップを実施した。つくられた屋台は、有志学生がつくった明学屋台部によって、学内外様々な場所で活動している。本学教員や戸塚地域住民、卒業生と連携しながら、戸塚まつりでの焼きおにぎり屋台の出店（高知県須崎市で醤油屋を営む卒業生が醤油を提供）、戸塚善了寺のサマーキャンプでのワークショップ実施、日本ボランティア学会への参加、キャンパス・ピクニックなど多方面で活躍し、大学内外に新しいコミュニティをつくりだす〈メディア〉としての屋台の可能性を日々開発している。

### 2) 郡上おどりin戸塚（会場 横浜キャンパス&善了寺）

今年も戸塚まつりにおいて、郡上おどりを通じたトークライブとワークショップ、そして踊りの実演を行った。郡上の若手御囃子グループ「郡上舞紫」のメンバー10名をゲストとして招き、大学キャンパスでは学生による郡上おどり紹介から、ゲストを交えた郡上おどりの歴史的・文化的背景に迫るトークライブと踊り体験を行った。郡上おどりの歌詞を自作し、お囃子で実演するワークショップを行った。その後、矢部町の善了寺に移動し、郡上おどりの実演を行った。あいにくの雨で本堂での開催となったが、50人以上の方の参加が見られた。

今年度の特色は、共通科目「ボランティア実習」や、国際学部の「インターンシップ」などの授業を通じて、郡上八幡との関係を深めた学生が、プログラムを企画した点にあり、報告会や研究発表とは別の形で、授業の成果を表現する方法の探求を行った。

4年目の開催となり、地域の方も戸塚の郡上おどりを初夏の恒例行事として楽しみにしている。踊りを通じた、地域連携が生まれている。講師謝礼40,000円、講師宿泊20,000円。

## 植木企画

食を媒介とした自由な対話やコミュニティ形成を課題とし、学生課、横浜図書館、健康支援センターなどと協力、「朝カフェ」(5月22日)、「ひとりぐらしのための料理教室」(5月28日および12月17日)を実施した。

1) 「朝カフェ」は参加者15名で、朝刊を読み比べ、気になる記事についてディスカッションを行った。1限前に朝食を一緒に食べ、その場で与えられた課題を整理して自分の意見を伝える知的ウォーミングアップで始まる一日の充実感を味わってもらうためにも定期開催を目指したい。

2) 5月の「料理教室」は14名の参加があり、親子丼を作った。ひとり暮らしを始めた学生を対象に、食事作りの技術習得と共に、近所に住む仲間としての繋がりを築くことが目的である。同時に化学の視点からのミニレクチャーを実施することで、調理の原理や合理性も身につけてもらう意図がある。実施後、参加者同士の連絡先交換などの姿が見られ、食を通じたネットワーク形成に一定の役



割を果たせたことを確認した。

12月の「料理教室」には16名の参加があり、学内で採れた大根を使った料理を行った。メインの料理はおでんで、今日のおでんが成立するまでの歴史を簡単に辿るミニレクチャーも行った。また、大根の皮や葉っぱを使った料理も作り、全部を使い切る伝統の知恵についても体験した。屋台部の学生たちの協力により、屋台でのおでんも楽しむことができた。

## 上野企画

### 1) 学生活性型カフェ第1弾「アート・ワークショップvol.1：自分創作工房」(7月7日)を2号館3階生物学学生実験室にて実施

自分の内面を見つめることは大変重要だが、このワークショップでは自分の体のパーツを創作することを通して、客観的に「自分」をみつめ、感じ、考えていくことを目的とした。粘土細工の作家から直接指導を受けながら、指(初級者)、瞳(中級者)、口(上級者)といった3つのパーツを3時間程度で完成させた。12名の学生が参加したが、創作後の作品鑑賞会では学生どうしが互いに交流し合い大変和やかな雰囲気となった。(レジックス粘土やボンド等の消耗品29,600円、講師謝礼22,274円：交通費込み)

### 2) 学生活性型カフェ第2弾「性を語る大人カフェ」(11月30日)を2号館3階生物学学生実験室にて実施

産婦人科医師の早乙女智子氏による解説の後、学生たちの性に関するさまざまな悩みに対し、1つ1つ丁寧に回答していくというキャッチボール形式により理解が深められた。学生たちからはこのような場を定期的に開いてほしいと切なる要望が出た。(講師謝礼33,411円：交通費込み)

### 3) 学生活性型カフェ第3弾「アート・ワークショップvol.2：クリスマスにいかが？オリジナルギフト創作工房」(12月22日)を2号館3階生物学学生実験室にて実施

この1年間の自分へのご褒美、あるいは、大切な人のことを思い浮かべながら心のこもる手作りギフト「X'masターキーストラップ」を創作した。創作指導は1)と同じ、ミニチュアフードから古代生物まで「リアル×芸術」を探究する相澤美和氏にお願いした。クリスマスソングをBGMに、楽しくかつ真剣に粘土細工に取り組み、本物そっくりの美味しそうなX'masターキーを創りあげた。(講師謝礼27,842円：交通費込み)

13名の参加者は、自分創作工房(7月7日)の参加者とは異なったが、どちらのアート・ワークショップ企画においても、学生たちからまた開いてほしいと強い要望が出た。創作に夢中になることで好奇心や集中力が引き出され、出来上がった作品をみんなで鑑賞することでセンスの多様性を認識し、作品を通して自然な対話が可能になる。日頃、接触のない学生どうしがつながるこうした機会は貴重であると感じた。

### 三角企画

#### ・「自分の〈強み〉を考えよう」

春季休暇中に本学学生および一般を対象としたワークショップを開催予定。

本学学生にはあらかじめバッキング他（田口俊樹訳）『さあ、才能（じぶん）に目覚めようーあなたの5つの強みを見だし、活かす』を配布する。この書籍に付属するストレンクス・ファイnderテストのアクセスキーを利用してウェブサイトです分析を受けたうえでワークショップに参加、自分の〈強み〉について考え語り合う機会をもつ。

一般参加者を受け入れることにより、〈強み〉とこれからの生き方、職業選択などの関連についての話しあいに厚みが出るのが期待される。

予定される経費：外部講師謝礼25000円（交通費込み）・テキスト代35000円（20冊分）。

# 股関節内転筋力発揮が大腿四頭筋各筋の活動に及ぼす影響

プロジェクトメンバー：黒川貞生、亀ヶ谷純一、杉崎範英(千葉大学)、佐久間淳(武蔵丘短期大学)

## 研究成果の概要

本プロジェクトでは、膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋の活動が、股関節内転筋力の発揮により変化するか否かを明らかにすることを目的とした。目的を達成するための予備的実験（研究1）として、表面筋電図法を用いて内転筋群の筋活動レベルを定量的に評価する手法の確認を行った結果、大内転筋および長内転筋について、表面筋電図法を用いて筋活動の定量的評価が可能であることが確認された。その後、本実験（研究2）として、等尺性膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋の活動に内転筋力の発揮が及ぼす影響を確認する実験を行った結果、内転筋力の発揮の有無は、膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋の活動に影響を及ぼさない可能性が示された。ただし、この結果は、被験者数不足に起因する可能性が否定できなかった。そのため、本報告書提出後も継続的に研究を行う必要があると考えられる。

## 研究の背景と目的

膝関節周辺の障害の40%程度を占める膝蓋大腿部痛症候群は、内側広筋と外側広筋の筋力のアンバランスが原因で起こるとされている。いくつかの先行研究では、股関節内転筋力を発揮しながら膝関節伸展動作を行うことにより、筋活動における内側広筋/外側広筋比を高めることができるとされており（Irish et al. 2010など）、リハビリテーション現場においては、このようなエクササイズが実施されている。しかしながら、股関節内転筋力の発揮は内側広筋と外側広筋の筋活動比に影響を及ぼさないとする研究も多い（Hertel et al. 2004など）。このように先行研究間で見解が一致しない理由の一つとして、各筋の活動の定量方法の問題が挙げられる。すなわち、従来の研究では、各筋の活動の指標として、筋電図法や磁気共鳴画像のT2値などを用いているが、これらは神経系からの入力や筋収縮の代謝産物を反映したものであり、筋の発揮張力（機械的な出力）を直接反映したものではない。

一方、発揮筋力の増大に伴い羽状筋における羽状角（筋線維が腱組織に付着する角度）は増加し、筋線維長は短縮することが知られている（Fukunaga et al. 1997）。このことから、筋活動中の筋の形状を定量することにより、各筋が発揮している張力の大きさを推定できると考えられる。そこで、本研究では、筋電図法に加え、超音波法による筋線維長および羽状角変化の定量を用いて、股関節内転筋力発揮が大腿四頭筋各筋の活動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

## 研究1（予備的実験）：表面筋電図法を用いた大内転筋および長内転筋各筋の筋活動導出の可否【目的】

超音波法を用いて特定した大内転筋および長内転筋の筋腹位置で導出した表面筋電図が、互いの筋その他の隣接する筋（特に半膜様筋）のクロストークの影響を受けないことを確認する。

**【方法】**

- ①超音波診断装置（Prosound2, アロカ社）を用いて、被験者の大腿部内側前方から内側後方にかけて撮像を行い、大腿内部における各筋の位置を確認した（図1参照）。
  - ②様々な動作（自転車エルゴメーターを用いた自転車駆動運動、トレッドミルを用いた歩行および走行、階段昇降運動、スクワット運動）を行った際の大内転筋、長内転筋、半腱様筋、半膜様筋の筋活動を観察し、個々の筋において独立した筋電図信号が得られるかを確認した。
- なお、①、②とも、の健常青年男性12名を対象に実験を行った。

**【結果】**

- ①すべての被験者において、大内転筋および長内転筋と隣接する筋群の境界線を明確に特定することが可能であった（図1）。また、表層部における各筋の面積は、隣接する筋に重なることなく筋電図用電極を貼付することが十分可能な程度の大きさであることを確認した。
- ②各動作中の各筋の筋放電信号のパターンは独立していることが確認された（自転車駆動の例:図2）。

**【結論】**

表面筋電図法を用いて大内転筋および長内転筋の活動を個別に観察することが可能であることが確認された。

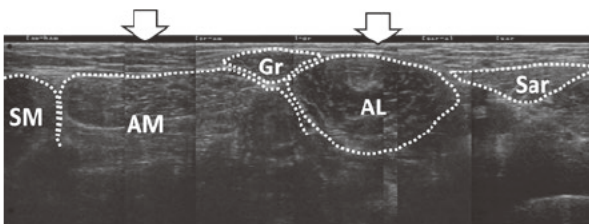


図1 Bモード超音波法を用いた大内転筋および長内転筋位置の特定（典型例）。SM、半膜様筋；AM、大内転筋；Gr、薄筋；AL、長内転筋；Sar、縫工筋。矢印は電極貼付位置を表す。

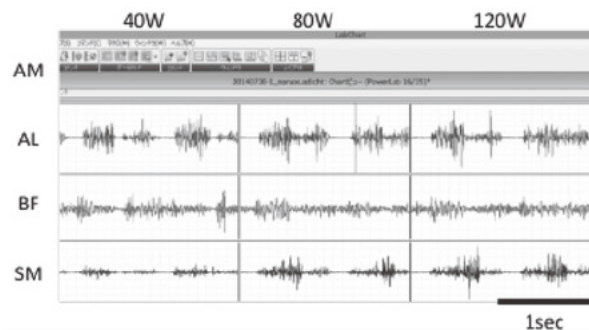


図2 自転車駆動時の内転筋およびハムストリングの筋活動パターン（典型例）。AM、大内転筋；AL、長内転筋；BF、大腿二頭筋；SM、半膜様筋。各筋の放電パターンは異なり、クロストークはないと考えられる。

## 研究2 (本実験):内転筋力発揮が膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋の活動に及ぼす影響

### 【目的】

内転筋力発揮によって膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋の活動が変化するかを確認する。

### 【方法】

被験者（健常成人男性6名）が、等速性筋力計（BIODEX3 酒井医療）を用いて、内転筋力を発揮する条件と内転筋力を発揮しない条件の2条件で、等尺性膝関節伸展筋力発揮を行った。この際、膝関節伸展筋力は最大努力の25%、50%、および75%の3条件を設定し、内転筋力は最大努力の50%とした。試行中、膝関節伸展筋力は等速性筋力計で、内転筋力は股関節内外転筋力計（T.K.K.3367b, 竹井機器）を用いて測定した。

筋力発揮中に、外側広筋、内側広筋、大腿直筋、大内転筋、長内転筋、およびハムストリングの筋電図を導出した。また、超音波診断装置（SSD-2000, ALOKA社製）を用いて、等尺性膝関節伸展筋力発揮時の外側広筋、中間広筋、および内側広筋の筋線維長（筋束長）および羽状角を測定した。

### 【結果】

#### 筋電図活動について

膝関節伸展筋力発揮時の大腿四頭筋各筋（外側広筋、内側広筋、大腿直筋）の筋放電量は、いずれも股関節内転筋力発揮時の方が大きい傾向が認められたものの、その差は統計的に有意ではなかった。

#### 筋束長と羽状角について

膝関節伸展筋力発揮時の外側広筋、中間広筋、内側広筋の筋束長および羽状角は、25%、50%、および75%のいずれの条件においても、内転筋力発揮ありとなしで統計的に有意な差は認められなかった。ただし、内転筋力あり条件において外側広筋の羽状角がやや大きい傾向が認められた(図3)。

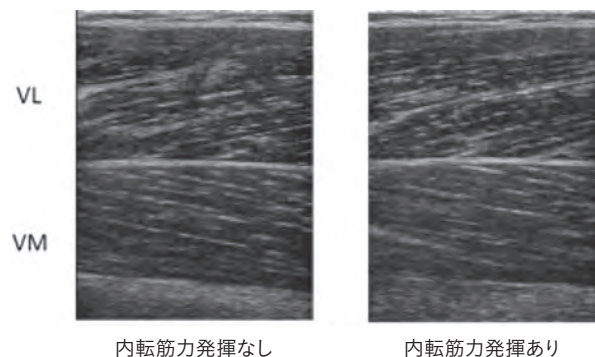


図3 膝関節屈伸筋力発揮時の外側広筋および中間広筋の筋束形状最大努力の25%の例。左：内転筋力発揮なし、右：内転筋力発揮あり。VL：外側広筋、VM：中間広筋。

## 【結論】

本研究の結果からは、股関節内転筋力発揮の有無は大腿四頭筋各筋の活動に影響を及ぼさないことが示唆される。すなわち本結果からは、リハビリテーションの現場で用いられている手法が効果的ではないことが示唆される。ただし、有意傾向を示す結果もあったことから、本研究の結果が被験者数の不足に起因する可能性がある。そのため結論を得るためには、研究を継続する必要があると考えられる。

# 文化理解とコミュニケーション能力向上のためのスペイン語教育の試み

プロジェクトメンバー：大森洋子(研究代表)、原田勝広、大森洋子(報告執筆)

このプロジェクトでは、スペイン語初学者が実際にSkpeを使って指導者と会話をしながら学習を補強するとともに、内容をラテンアメリカ、グアテマラの文化にスポットをあてたコースに学習者を参加させ、学習動機を維持させるとともに文化理解の補強をはかるのである。

受講者 21名(内訳 社会学部 1名 法学部 3名 国際学部 15名 心理学部 2名)

受講開始：6月13日より毎週1回12回

1回50分の授業を12回重ねることにより、回をおうごとに学習者がどのように変化していくかを今年度は学習者と会話をしている実際の講師からの聞き取り調査、報告書から分析することを目的とした。(1年目は学習者からのアンケートを主にまとめた。)

学習者にとっては、自分のレベルに合わせた会話を行い、教材を授業で使っているものに準拠して作っているためにAula virtualよりも受講希望者が多い傾向を示していた。しかしながら、残念ながら様々な運営上の問題があることも否めず、今後は問題解決のための策を考えた上で、新たな試みを模索する必要があると考える。

まず第1に、提携して授業提供をお願いしているスパニッシモの対応が非常に遅く、学生への対応、準備等に手間取ったことは否めない。人数の確定、それぞれの学生の担当教員、時間配分などが難しかったことが挙げられる。2年目に入り、教員との交流もとりながら受講プランすすめる学習の効果をはかる予定であったが、受講後の今の段階でも報告書は届かず、今後の学習の継続には課題が残る形となった。

第2に、スパニッシモがグアテマラを拠点に展開しているため、まず時差の問題が生じた。学生が学習したいと意欲がありながら、時間が合わないなどの問題があった。12回の授業を行うのに、毎回同じ時間に合わせてパソコンの前に座るとするのは今の学生のライフスタイルではむしろかしく、学校単位で実施をすると時間帯が決定されるために時間が合わないなどの問題で受講率が7割程度にとどまっている。さらに、グアテマラのインターネット接続状況とも関係し、接続状態が悪いために授業が行われないことも多くあり、これらの点も加味したかたちでコース設計する必要があることが明らかになった。

学習者にとっては、直にラテンアメリカ事情をしる良いきっかけになる企画であるが、今後はこのような問題をクリアーできる学校を探し、学習者の学習に連携をはかることができる準備をして、さらに試みを発展する形で、学習者の文化的な理解と言語学習の向上のためのプログラムを考えていくことが今後の課題である。

# 明治学院における日本の朝鮮統治期留学生の活動に関する再評価プロジェクト

プロジェクトメンバー：嶋田彩司

2014年度のプロジェクト計画は、2013年度プロジェクト「日本の朝鮮統治期における明治学院留学生に関する共同研究」の成果を継承し、さらに発展させることを目標に計画申請し、承認を得た。その事業計画は下記の通りである。

2013年度のプロジェクトは、いわゆる植民地時代を中心とする明治学院ゆかりの朝鮮半島出身者の事跡をあらためて確認し、その歴史的意味を現代の視点から再検証することにあった。数度に及ぶ研究会等を通して得られたその成果は、11月9日に開催される李光洙に関わる国際シンポジウム等によって学内外に示されることとなる。

しかし、当該時期の明治学院同窓留学生は李光洙のみではない。おなじく文学関係でも、金東仁（1900～1951）、朱耀翰（1900～1979）が知られており、また研究者、政治家として活躍しつつ後進の教育に大きな業績を残した白南薫（1885～1967）や文一平（1888～1939）等々、明治学院ゆかりの人物は多数存在し、残念なことながらその足跡はいずれも学内の一部の関心を集めるにとどまっている。

2014年度のプロジェクト研究においては、これら明治学院に学んだ朝鮮半島出身留学生について、その資料発掘と再評価の作業を進展させることを目的とする。

仄聞するところによれば、学院としてこれらの留学生たちを顕彰する事業が検討されており、承認を得られれば2014年度中にもそれが実現するという。もとより安易かつ単純な顕彰作業がおこなわれるものとは考えないが、じゅうぶんな吟味と意見交換を通して、当該者に対する多面的な評価がおこなわれることが望ましい。本プロジェクトは結果として、上記事業計画案を次の150年の評価にも耐え得るものとすべく、関係者の冷静な調査研究と議論の場となることをめざしている。

残念ながら、本年度のプロジェクトは上記の計画に照らして順調に進展、推移したとはいえない。ただ、残された時間（本稿執筆は1月上旬）を利用し、年度内もしくは次年度にかけて、上記の目的の達成に向けて活動を進めていきたいと考えている。

具体的には、明治学院に学んだ朝鮮半島出身留学生についてのシンポジウムの開催が考えられる。上記のように、2013年度の研究プロジェクトを基盤として、2013年11月に李光洙に関するシンポジウムを開催した。次回に開催するシンポジウムは、それを発展的に継続したものになる。

その企画に関する指針をふたつ挙げておく。

1、朝鮮半島出身留学生のうち、のちに作家、詩人として朝鮮半島における近代文学に影響を与えた者は、李光洙にとどまらない。下記の二名をはじめとして、それらの者の軌跡を総合的にとらえ、文学的トポスとしての明治学院に着目する。

朱耀翰（1900～1979）は詩人として知られる。「火祭り」は近代的な自由詩として教科書等にも載せられており、その浪漫主義的な詩風は1913年からの明治学院中等部在学中に育まれたものといつてよい。『白金学報』の学生委員をとつめながら、そこに彼はいくつかの作品を発表している。「火



祭り」は卒業後、東京第一高等学校時代に雑誌『創造』初号に発表されたものであるが、その文学的土壌はすでに学院在学中に熟成のときをむかえつつあったといつてよい。

上記『創造』創刊号に短篇小説「弱き者の悲しみ」を発表したのが、金東仁（1900～1951）である。自然主義的傾向のつよい作品を書いた小説家として知られ、韓国文学界の権威ある賞のひとつに彼の名が冠せられている（「東仁文学賞」）ことからわかるように、現在なおその評価は高い。彼の明治学院中学部入学は1915年、朱耀翰に文学的な影響を受けたとされている。

明治学院が明治期文学の一極を形成した『文学界』の拠点のひとつであったことはよく知られている。直接的な影響関係を計測することはむずかしいとしても、学院に横溢する文学的な雰囲気、朝鮮半島出身留学生を感化したことは注目されてよい。

2、上記の三名は、朝鮮半島における近代文学の開拓者であると同時に、植民地被支配下にある朝鮮半島の独立を目指す若き運動家でもあった。そして、これには、白南薫、文一平、金鴻亮といった、のちに教育や歴史研究等の分野で名をなすこととなる者たちも参画している。

文一平（1888～1939）は歴史学者。1905年に明治学院普通部に入学した。歴史研究家として知られる一方で、記者を経て朝鮮日報編集顧問に就任するなど、ひろく言論界で活躍した。

白南薫（1885～1967）は、教育事業に携わるとともに、政治上の要職も歴任した人物である。

金鴻亮（1885～1950）は1906年明治学院普通部入学。民族運動家で、安岳事件に関与したとして服役したこともある。

これらの人物は、二・八独立宣言から三・一独立運動へとつづく植民地被支配打破の運動においてきわめて重要な働きをしている。佐藤飛文はこのことをもって「朝鮮独立運動の拠点（または独立心の醸成所）としての明治学院」と評しているが、まさに日本における独立運動においては明治学院が一つの起点になっているといえるであろう。とともにこれらの人物は、解放後の朝鮮半島における言論活動の歴史でも重要な位置を占めている。東亜日報、朝鮮日報（ともに1920～）は今日なお韓国の主要な新聞紙であるが、これらの創刊時に関わりをもった人物は多い。文学のみならず政治もまた「ことば」による伝達の営為であるといつてよい。明治学院が、朝鮮半島出身留学生に与え得たものとは、畢竟「ことば」であったのかもしれない。

# Leveraging Technology in the General Education EFL Classroom (大学共通科目におけるEFL教育へのテクノロジーの応用)

J. Kevin VARDEN • D.M. GRIMES-MACLELLAN

## I. Introduction

From multi-media rich textbook web sites to e-Learning systems focusing on administrator needs, technological advancements over the last decade have provided both foreign language instructors and program administrators a wealth of opportunity for increasing the efficacy of their classes and programs. In particular, e-Learning systems allow centralized access to materials that facilitate blended learning: classroom activities supported and supplemented by online materials. In addition, video chat services such as Skype hold great promise for live conversation with native-language foreign language instructors or tutors. (Witness the development of “Skype in the classroom” service at <https://education.skype.com> and the recent explosion of Skype lessons advertised on the Internet.) These components can be combined to allow synchronous small-group instruction in class supported by media-rich online material, thereby increasing both language exposure time and student motivation.

To investigate the implementation of these technologies in the General Education EFL classroom, the Foreign Language Education Reform Working Group (WG) of the Meiji Gakuin’s General Planning and Development Office and the Center for Liberal Arts undertook a pilot course in Academic Year 2014, bringing Skype into the General Education EFL classroom proper. Students from seven academic departments and eleven instructors participated. Roughly half of each class was spent studying academic English Listening and Speaking with a Philippine instructor contracted by Waku Work English, and the other half spent with a Meiji Gakuin instructor studying academic Reading and Writing. In addition, the textbooks’ media-rich Online Workbooks were used to supplement class activities, and a Moodle was installed on a university server to facilitate communication within and between instructors and students.

## 2. Project Aim

The aim of this project was to support instructors during the implementation of this technologically-rich General Education EFL course at the university. To improve overall instructor and student satisfaction with the pilot course, training sessions and round-table workshops were held to prepare and support instructors during the implementation of the course, and to solicit their comments upon its completion.

## 3. Project Activities

### 3.1 Instructor training sessions

In preparation for Spring Semester, two training workshops were held for the pilot course instructors. The first was held on February 24, 2014. At this workshop pilot course instructors

were introduced to the pilot course textbook *Unlock*, a new academic English-focused series from Cambridge University Press. Effective text use and classroom management issues were then discussed. On March 20, 2014 a second day of workshops was held. First, representatives from Canon IT Solutions introduced the Moodle system to the instructors, and fielded questions on its use. Next, Gavin Dudeney, a teacher trainer affiliated with Cambridge University Press, gave a presentation covering both motivation for and methods of teaching academic English. Pilot course instructors then met for a one-hour workshop where details on the pilot curriculum and class management were discussed.

### 3.2 Spring Semester Round-table Workshop

At the beginning of July, pilot instructors were sent a questionnaire soliciting opinions about Spring Semester pilot classes. These were submitted to the program coordinator for compilation. On July 23, 2014, ten of the eleven pilot instructors gathered for a 3-hour round-table workshop to present their opinions and experiences and exchange views with the other instructors. Nine of the instructors then gathered at a local area restaurant for further comment and discussion. A compilation of the instructors' opinions and suggestions was forwarded to the WG.

### 3.3 Conference Presentations

On August 5, 2014 Professor Varden gave a presentation entitled "Leveraging Technology in the GenEd EFL Classroom" at the 54th Annual All-Japan Conference of the Japan Association for Language Education and Technology (外国語教育メディア学会の第54回全国研究大会). The presentation focused on the technology used in the program, introducing the Skype lesson component and the use of Moodle for communication between instructor and student groups. Approximately 15 members of the associations attended the presentation. In addition, on November 24, 2014 Professor Grimes-MacLellan gave a presentation entitled "Multiple Voices on Skype in the EFL Classroom" at the 40th Annual International Conference of the Japan Association For Language Teaching (第40回全国語学教育学会年次国際大会). The presentation discussed the implementation of a pilot project to enhance student opportunities for language learning through Skype video chat in a university EFL General Education Program. In particular, it explored the perceptions and attitudes toward Skype lessons of various project stakeholders including teachers, students and program administrators.

### 3.4 Fall semester Round-table Workshop

As a final wrap-up to the pilot program and the project's activities, pilot course instructors

gathered for a final Round-table workshop on January 30, 2015, to discuss Fall semester. The round table was followed by a presentation by Professor William Snyder of the Kanda University of International Studies Graduate TESOL MA program, who spoke on instructor-student interaction in the classroom. Following the presentation, workshop attendees retired to a local area restaurant for further discussion.

### 3.5 Project summary article

A summary of the pilot program will be published in the Institute for Liberal Arts' journal *Karuchuru*. The paper will include discussion of the reasons for the pilot program's initiation and preliminary results from Spring semester, as well as general comments on the efficacy of the mixed component course format. In addition, a fuller description of the pilot program experience was forwarded to the WG.



05

---

公開講座報告

05



# アナザー ストーリー



明治学院の  
150年 外伝  
2014



## “2014年度 明治学院大学公開講座”

J.C.ヘボンの開塾を淵源とする明治学院大学は、昨年創立150周年の節目を迎え、学内外で様々な記念行事が開催されました。今回の公開講座では、そのアフタープログラムとして、学院ゆかりの5名の人物をとりあげ、その足跡をたどります。彼らの“過去”は私たちの“未来”の道標。151年目の明治学院大学をお伝えします。

**期 間** 2014年10月11日～11月8日 毎週土曜日 全5回

**時 間** 13:30～15:30

**場 所** 明治学院大学 横浜校舎 (アクセス JR戸塚駅よりバス10分)

**申 込** チラシ裏面を参照のうえ、申し込んでください

島崎藤村の写真は、中津川市藤村記念館のご提供です。同館了承のもと、色彩の調整をしています。

MEIJI GAKUIN

2014年度 明治学院大学公開講座

アナザーストーリー

明治学院の150年 外伝

プログラム

	日付	講演テーマ	講演者
第1回	10/11 (土) 開講式 (10分)	「日本人最初の海外伝道者・乗松雅休」	信長正義 日韓関係史研究「むくげの会」会員
第2回	10/18 (土)	「韓国近代文学の祖・李光洙」	波田野節子 新潟県立大学名誉教授
第3回	10/25 (土)	「教育と伝道の使者 ——S・R・ブラウン博士——」	中島耕二 本学教養教育センター客員教授
第4回	11/1 (土)	「井深幌之助が目指したもの ——理想と現実のはざままで——」	渡辺祐子 本学教養教育センター教授
第5回	11/8 (土) 開講式 (10分)	「明治学院校歌と島崎藤村 ——1906年の緑葉——」	嶋田彩司 本学教養教育センター教授

- 日 時** 2014年10月11日～11月8日 13:30～15:30 毎土曜日 全5回
- 募集人数** 120名(定員に達し次第、受け付け終了)
- 会 場** 明治学院大学横浜校舎 10号館1031教室  
徒歩またはJR戸塚駅東口よりバスをご利用ください。車両等での入構はできません。
- 受講料** 1000円。受講初回時に受付で納付。受講回数にかかわらず一律で申し受けます。納付時に、下記受講票をご提示ください。なお、払戻しはできません。
- 申込方法** ①お名前(フリガナ) ②ご住所(郵便番号) ③電話番号 ④性別 ⑤ご年齢をお書きのうえ、下記のいずれかの方法でお申し込みください。
- 往復はがきの場合 〒108-8636 港区白金台1-2-37 明治学院大学 総合企画室(地域連携推進担当)宛
  - E-MAILの場合 ykougai@mguad.meijigakuin.ac.jp
- ※折り返し、受講票をお届けします。E-MAILの場合は、印刷してご持参ください。  
※個人情報、本学の規程に則って厳密に管理し、講座等のご案内以外の目的での使用および第三者への提供はいたしません。
- 申込期間** 2014年9月30日(火)まで(往復はがきの場合、消印有効)  
※定員超過の場合、期限内であっても受講をお断りすることがございます。あらかじめご承知おきください。

企画 明治学院大学 教養教育センター附属研究所

●出席状況

	9/26	10/6	10/13	10/20	10/27
受講者数	65	56	49	42	44



# 日本人最初の海外伝道者・乗松雅休

のりまつまさやす

むくげの会会員、教団宝塚教会信徒 信長正義

## 1. 乗松と明治学院



○乗松雅休。1896（明治29）年末、単身朝鮮半島に渡り、ソウル、水原（スウォン）を中心に朝鮮人と同様の生活で、経済的には大変な苦労を重ねながら伝道に従事、朝鮮民衆から深い信頼を得た。日清戦争後の反日感情が強くなり、最も日本人が嫌われた時代に、兄弟として慕われた伝道者であった。乗松の墓は本人の遺言で水原に建立され、現在も韓国の「基督同信会」の信徒によって守られている。

○「乗松雅休（1863－1921）は1887（明治20）年1月、横浜で初めて教会に行った。その年の秋、伝道者になるために首藤とともに明治学院に入り、2年余を過ごしたとき、イギリスからブランド宣教師が来日して宣教し、日本橋教会から多くの信徒がブランドの群れに入る“日本橋教会離脱事件”が起こった」【『乗松雅休覚書』（大野 昭。キリスト新聞社、2000年）】（乗松は祖母の弟）。

○但し、明治学院大学資料室にはその在学を証明する資料がない。

…正規の在学証明のない「在学証明」⇒参考資料①

## 2. 「キリスト同信会」の誕生と乗松の入会

(1)1888（明21）年11月 イギリス人H.G.ブランドの来日（23歳）。約30年にわたって日本・朝鮮で宣教活動。無名。英国聖公会→プリマス兄弟団（プリマスプレズレン）＝異端視されていた。

(2)1889年4月 日本橋教会（日本基督教会）青年7人の教会離脱事件。会堂もない、無牧の集会。その一人が受洗希望。ブランドを紹介され、10月から聖餐が行われる礼拝が始まる。⇒「キリスト同信会」

(3)乗松の入会

日本橋教会⇒北村牧師の辞任後無牧、教会からの離脱者が増加。神学生・乗松が主日説教担当。7人の最年少者・浅田洋次郎（15歳）の父・浅田喜三郎が信者を呼び戻す「勧告委員」。→ブランドと語り合った後その集会に一族を連れて出席。びっくりした乗松は喜三郎と徹夜討論→ブランドに会う（1890年初）

○日本各地の地方伝道・開拓伝道をおこなっていった。⇒参考資料②

植村正久（東京神学大学創設者）は、「プリマスプレズレンはその奇僻なる教義を説き」と言い、異端視し、教会荒らしと呼んだ。『植村正久著作集4』（新教出版社）

## 3. 乗松の朝鮮伝道の動機

1896（明治29）年12月に朝鮮に渡る。

(1)反日感情高まる当時の朝鮮の政治的・社会的状況

(イ)1876（明治9）年 日本との江華島条約で門戸開放

＊朝鮮からのお米輸出の自由、輸出品に対する関税の免除、日本貨幣の朝鮮国内流通

(ロ)1884（明治17）年 甲申政変＝金玉均や朴泳孝らの急進的開化派によるクーデター。

失敗し、三日天下におわる。金玉均や朴泳孝ら日本に亡命。 のち、朴泳孝は明治学院に入学。

(ハ)1894（明治27）年 東学農民革命および日清戦争

＊東学農民革命（東学農民戦争、甲午農民戦争、東学乱）⇒参考資料③イ、ロ

《推薦図書》『東学農民戦争と日本 ―もう一つの日清戦争―』（中塚明ほか、高文研、2013）

＊ある学者の説によれば日本軍によって殺された農民軍は5万人におよぶという。

(ニ)1895、10「閔妃暗殺事件」。日本の軍隊（京城守備隊）、日本人壮士ら、王宮に侵入、王妃（明成皇后）を殺害する。【日本人の歴史認識が問われる事件】

《推薦図書》『朝鮮王妃殺害と日本人』（金文子、高文研、2009）

(2)朝鮮伝道の動機

(イ)『最初の海外伝道者 乗松雅休覚書』（大野昭）⇒参考資料④

(ロ)『恩寵と真理』（同信社。福田賢太郎「乗松雅休兄記念号」）⇒参考資料⑤

(ハ)○明治学院で朴泳孝と出会った？

朴泳孝は1887（明20）年春、乗松は同年秋に明治学院に入学。⇒参考資料⑥

○新潟県「奇生館」で乗松と朴泳孝が出会う？⇒参考資料⑦、参考資料⑧

二人はこの「奇生館」でたびたび会い、朝鮮の状況や日本人の横暴らを話し合った？

(ニ)『キリスト同信会の朝鮮伝道』（信長正義 むくげ叢書3）⇒参考資料⑨

4. 朝鮮における伝道

(1)渡航直後の状況

同信会発行の資料を総合すると、1896年12月、京城（ソウル）に着き、神戸の米国人歯科医から紹介されていた医療宣教師を訪問すると、小林石松という信者がいた。また、上田貞治郎の紹介で、5月に西宮から移ってきていた織居宅を訪ね、その知人の所有する朝鮮家屋を借りることになった。しかも、小林石松と一緒にいた朝鮮人青年二人が日本語学校の生徒だった。この青年には聖書を語って日本語を教え、彼らから朝鮮語を教えられた。

(2)ブランド夫妻も朝鮮伝道開始

1898（明31）年6月、ブランド夫妻がソウルに到着し伝道を開始する。

その頃の乗松の手紙には、「ただ自分がいかに弱く、いかに無益なものであるかを思い、恥じる

ことが多い」と嘆いている。

#### ○乗松の結婚

1899年6月、乗松は首藤新蔵の姪・佐藤恒子と結婚。乗松は結婚後2か月間、山形や越後地方の伝道旅行に新妻の恒子を同伴している。

#### ○朝鮮において極貧の生活を送る。

#### (3)水原（スウォン）移住の動機

##### ○1900（明33）年8月 水原に移住（⇒参考資料地図）

イ あまりの飢えのために卒倒したことがあり、ブランドの援助を受けるようになった。このブランドの援助を避けるために。

ロ 乗松がソウルで路傍伝道をしていた時に、水原から来た人が乗松宅を尋ね、水原地方に来てほしいという依頼を受け訪問したことがある。

ハ ブランドと共にするいわば西洋文明のある生活から、もっと朝鮮の人々の中に、その国に土着したかった。それらの人々と生活を共にしてキリストを証したかった。

#### (4)水原での伝道

李昌民（イチャンミン）親子の強い誘いと援助によって水原地方の伝道に精を出し、その土着化の伝道方針は「この地に自らの骨を埋めようとして朝鮮人になりきること」にあった。⇒浅田洋次郎の書簡から。⇒参考資料⑩

#### (5)一時帰国、再び水原へ

(イ)1904（明37）年2月、日露戦争勃発 →1905年8月ポーツマス条約で日露戦争が終わると、韓国の外交権を奪って、韓国に日本政府を代表する統監府（後の朝鮮総督府）を置いた。→反日義兵闘争

○1904年11月、ブランド、ソウルでの集会を最後に日本に引き揚げ。

○1905年8月、乗松一家、東京に引き揚げた。それまでの乗松に関する報告⇒参考資料⑪

○1906年初、再び水原へ 「主の日には男子のみにて4, 50名集まり、女子児童等もこれに加わり申候」とある。

●1907年、「リバイバル運動」（信仰復興運動）と称して、最もキリスト教信者が増加した時代。自ら神学校を建て、また大伝道集会が各地で開催され、キリスト教への関心が最高潮に達した時期。

旧約聖書の出エジプト記の物語と滅びゆく自国とを対比して救いを神に委ねる信仰。

(ロ)○1908年2月、妻・恒子は4人の子どもを残し、肺炎で死亡（32歳）。

1909年にキリスト同信会関係者が朝鮮に旅行したときの旅行記に「乗松兄が幼少なる4名の子女を擁し、万事忍耐の御状況を、今更のごとくお気の毒の感に堪えざりき」。

○1909年7月、宇津木勢八の世話で加藤和子と再婚。

自宅の集会では手狭となり、集会所「聖書講堂」を設立。⇒参考資料⑫

●1910年8月 韓国（1897年に国号を大韓帝国としていた）を併合。韓国は国ではなくなり朝鮮と呼ばれる日本の領土の一部となる。

○1912年4月 ブランド夫妻参加の水原大集会。4日間の参加者約400人、受洗者50人。

#### (6) 帰国とその原因

○1914（大3）8月、家族とともに帰国し小田原に住む。

イ 乗松の健康状態。『喜音』「氏の健康は日々に衰えていった。かねて結核をわずらっていた氏の肉体は、気候不順な朝鮮の、激しい伝道生活には耐えうべくもなくなっていたので、人々は見かねて日本に引き揚げることを勧め、強要せざるを得なくなっていた」。

ロ 『恥はわれらにほまれば神に一キリスト同信会の100年一』「…乗松としては和子をかばって帰国という一面もあつたのではなかったでしょうか」。和子は日赤の看護婦監督を務めた人で、皇室の誕生に看護婦として立ち会った経験を持ち、また帰国後、大正天皇の即位の式に皇后陛下に呼び出され青山御所に行ったほどの人。

#### (7) 帰国後の朝鮮訪問

(イ)1915～1919年の間に4回

1、第1回 1915（大4）年4月 「聖書講堂大集会」にブランドと乗松出席。

その時の出席者170人余、日本人10余人。受洗者21名。

2、第2回 1916年5月 京城聖書講堂。（酒井宇三郎が水原の集会を守る）

在朝日本人に堀佐太郎、人見たか子ら木浦に大規模農園と礼拝堂を建てた人々の名が連なる。

後に乗松の後継者となる金大熙（キムデヒ）の名も出てくる。

このころ日本で発行された同信会の本やトラクト、讚美歌を翻訳発行しようとしている。「讚美歌の翻訳に着手し、日々若干ずつ翻訳いたしおり候。金大熙兄翻訳に大なる助けと便益を得て主の御恩寵を感謝いたしおり候」

また、1917年に堀佐太郎の「朝鮮各地の集会一覧」によれば、4・5人あるいは6・7人の家庭集会が50カ所になるという報告がある。

3、第3回 1917年5月 13日間

4、第4回 1919（大8）年2月。

(ロ)1919年3月1日 「三・一独立運動」勃発。

乗松はこの運動を目撃する。

「3・1運動は最大の抗日運動」

3月6日の手紙に、当時の状況と乗松自身の態度が分かる文章がある⇒参考資料⑬イ

外国人宣教師が見た状況⇒参考資料⑬ロ

(ハ)日本軍による「堤岩里教会焼打事件」

1919,4,15 「堤岩里教会事件」(日本軍が29人を教会に閉じ込めて焼き討ちした事件)

水原から南西に20kmの距離にある小さな村の事件を外国人が発見して発覚。外国人が発見しなければどうなっていたか。⇒参考資料⑭

## 5. 朝鮮の独立運動に遭遇した乗松

『恥はわれらにほまれは神に一キリスト同信会の100年一』⇒参考資料⑮イ

『日本の朝鮮支配と宗教政策』(韓哲曦〈ハンソッキ〉 未来社)⇒参考資料⑮ロ

## 6. 就眠(永眠)

○1921年2月永眠。

(イ)乗松をしのんで⇒参考資料⑯イ、ロ

(ロ)納骨式と記念碑

○1922(大11)年4月、遺言どおり水原に遺骨が埋葬された。

息子・乗松由信の記録⇒参考資料⑰イ

○記念碑には金太熙が書いた乗松の生涯が正面に24字6行で記されている。

(その意味)⇒参考資料⑰ロと写真

○記念碑は朝鮮人によって建立⇒参考資料参考資料⑰ハ、ニ

解放後、朝鮮全土で日本人の碑などはすべて破壊されたが、朝鮮人によって守られたのは救  
ライ運動に力をつくした日本人と乗松だけの二つだけとされている。

(ハ)その生涯

佐藤得二(元東大教授で老後に『女のいくさ』で直木賞を受賞した。かつて水原の高等農林に  
勤めていた時、雅休のことを聞き資料を集めたが、帰途にカバンを奪われた。1930(昭5)。

⇒参考資料⑱イ

詩人・李烈 ⇒参考資料⑱ロ

○結び 乗松がもう少しアンテナを広げ、社会の動きに敏感であったなら、朝鮮の「キリスト  
同信会」という狭い範囲だけでなく、さらに多くの朝鮮人から愛されただろうし、日本人に  
よって国を奪われた朝鮮人の苦しみや悲しみを理解することができたのではないだろうか。

【参考資料】

- ① 『福音新報』（昭和14年（1939）7月13日、2261～2号）  
「初代の明治学院」（在米 村岡菊三郎）「…級中で聖書通の乗松君と首藤君は出色の聖書通であつが、とうとう神学校で学ぶのはもどかしいとでも考えたか、当時燎原の火の勢いで、各教会を荒らしたプレマスプレズレンに走っていった…」 その他『基督教新聞』等。
- ② イ 「もともとプリマス兄弟団は教職制をとらない平信徒の集まりですが、その中から『もっぱら主のご用をする』伝道者が生まれます。これは必ずしも神学校を出て按手礼を受けていなくてはならないというわけではありません。主の召命のままに伝道に立ち上がるのです。…キリスト同信会の場合、特に初代の伝道者は独立自給伝道が原則で、その伝道の動きに信者が『交わり金』をさし上げて伝道を助けるというかたちを取りました。…英米のミッションが始めた教会とちがい、キリスト同信会は最初から外国ミッションの援助をもらったことも、もらおうとも思わず、ずっと自前で集會し、文書活動をつづけてきたのです」  
『恥はわれらにほまれは神に —キリスト同信会の100年—』（藤尾正人、同信新書）
- ロ 「キリスト教徒中最も頑固なるプリマス・プレズレンの徒また入り来りて、その奇僻なる教義を説き、他派教徒の中にその種を蒔きて、大ひに収穫するところあらんとす」『植村正久著作集4』（新教出版社）
- ③ イ 2004年韓国国会で制定された「東学農民革命参加者の名誉回復に関する特別法」第二条（定義）  
「東学農民革命参加者というのは、1894年3月に封建制度の改革のために第一次蜂起し、同年9月に日帝から国権を守護しようと第二次蜂起して抗日武装闘争を展開した農民中心の革命参加者をいう」  
第一次は、封建制度の改革を求め、第二次は、7月に日本軍が朝鮮王宮＝景福宮を占領して親日政権を樹立し、日清戦争を朝鮮の地で始めた日本軍に対抗する「抗日闘争」。
- ロ 参謀次長・川上操六（参謀総長は天皇）から仁川の兵站部に送った電文「東学党に対する処置は厳烈なるを要す、向後悉く殺戮すべし」（1894. 10.27）【日本防衛庁防衛研究所所蔵『南部兵站監部陣中日誌』】
- ④ 『最初の海外伝道者 乗松雅休覚書』（大野昭）  
「…乗松雅休が政治的に反動保守勢力に対抗する意識で渡鮮(ママ)を決意したとは考えられない。その抱いていた終末的信仰理解と敬虔なエトスはとても政治世界に向くものではない

し、事実その後の行動も決して政治的ではなかった。ただ彼はそのような形で信仰者青年を殺害する禁制の国に福音を述べ伝えたいと願っただけであろう。状況は甚だ厳しくはあろうが、隣国の友として福音を語りたかっただけである」

⑤ 『恩寵と真理』（同信社。福田賢太郎「乗松雅休兄記念号」）

「日清戦争後、朝鮮に何か悲惨な事件が起こった。それを知った乗松兄は非常に心を痛められた。同兄の心は政治的、民族的に責任を感じるとか、同情するといった表面的なものではなく、朝鮮の人々が神の愛を知ることによって、真の幸福の生活に入るのでなければ、問題の解決にはならないと感じたようである。

『人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらされた父なる神』に励まされ、導かれて、何人にも頼らず、ただ神に信頼して朝鮮に渡られたものと思われる」。

⑥ 朴泳孝（박영효<パクヨンヒョ>）：1861～1939。 生まれは水原。

『韓国民族文化大百科事典 9』（韓国精神文化研究院）

…그러나 청국군의 즉각적인 개입으로 정변이 삼일천하(三日天下)로 실패하자 일본으로 망명하였다. 그뒤 본국정부의 집요한 송환기도와 일본정부의 냉대로 1885년 미국으로 건너갔다. 그러나 그곳 생활에 적응하지 못하고 일본으로 되돌아와 야마자키(山崎永春)로 이름으로 고친 뒤 명치학원(明治學院)에 입학, 영어를 배우면서 미국인 선교사들과도 친분을 맺었다.

(訳：…しかし清国軍の素早い介入で政変が三日天下で失敗すると日本に亡命した。その後、本国政府の執拗な送還の企てと、日本政府の冷遇で1885年に米国に渡った。しかしそこでの生活に適應できなくて日本に引返し、山崎永春という名前に変えたあと明治学院に入学、英語を習いながら米国人宣教師と親交を深めた。)

【明治学院英語科卒業】は1888（明21）年（『韓国近代人物百人選』（東亜日報））。

（1910年の日本による韓国併合後には侯爵となり、日本統治下の朝鮮における要職を歴任した）

⑦ ○1894. 3に金玉均が上海で暗殺される。

後藤象二郎・福沢諭吉らは越後の小高村の土田橘十郎の私塾「奇生館」に朴泳孝をかくまった（『ブランドさんとその群れ！』藤尾正人）。

⑧ 「それに乗松さんは朝鮮へゆく前に新潟県三条在の豪農・土田家に滞在して伝道しています

が、そのおなじ土田家に朴泳孝という朝鮮の内務大臣をつとめ、のち貴族院議員にもなった親日派の巨頭が亡命していて、彼から直接聞いた閔妃事件の情報は、ふつうの日本人よりはるかに正確に耳にしたと思われます。いや事の真相は日本人には知らされなかつただけ、乗松さんはこの事件を深刻に受けとめたと思うのです。そしておごり高ぶる日本人と、傾きゆく国運を嘆きつつ、経済的にも精神的にも疲れはてている朝鮮の人たちに福音を伝えようと海を渡ったのでしょう。『恥はわれらにほまれは神に一キリスト同信会の100年』

⑨ 『キリスト同信会の朝鮮伝道』（信長正義 むくげ叢書3）

「私はこれらの動機の底流にあったものは、彼が尊敬するブランドの日本伝道ではなかつたかと思う。ブランドが単身で日本に来て、言葉もわからず、何の援助もなく、ただひたすらイエスの言を語り、多くの信者を得た。乗松自身もブランドの群れの一員としてブランドを見つめて来たし、伝道者として立っている。

このブランドの日本伝道に倣って彼は外国伝道を志したものと思う。それが朴泳孝や上田貞治郎から聞いた朝鮮であった。そして自分とブランドとが重なり合つたと言えるだろう。と同時に、貧しい人々や虐げられた人に対する鋭い良心と感性を持ち、強い痛みを憶える人ではなかつただろうか。このブランドの群れの伝道者は組織を持たず、従って資金力も無いまま地方、特に東北や越後の地方伝道に出かけ、そこに暮らす農民たちの苦しさを自分のものにし、一層貧しいであろう朝鮮の農民に思いを馳せたと思われる。従って、彼には政治的なものは全くなく、より貧しい人々、より苦しんでいる人々に、ただ自分の信じる福音を語ろうとしたのではないかと思われる」

⑩ 「筆者（浅田洋次郎）はこの年の冬に（1903年）、浅田又三郎兄と共に朝鮮を旅せしが、ある夜、水原の乗松兄の寓居を訪ねて感動せり。衣服も、食器も、悉く朝鮮式であるのみならず、その頃4・5歳の由信さんが、朝鮮語の他には語らざるを見て、乗松兄は愛するお子さんに朝鮮語のみを教え、日本語を教えなさらぬを知りて驚けり。これ乗松兄が朝鮮伝道の祝せられたる理由の一つと思えり」（『先輩兄弟ら一明治編一』同信社）。

⑪ ソウルに住んでいた栗原包太郎の「感話」。「明治37年日露戦役の初めです。私は東京で教会にも行きましたが心から信ずる気になれません。ところが乗松兄と交際して、家庭の様子から日々の生活を見て、初めて真面目に福音を聞いてみる気になりました。乗松兄は決して信仰を強いられませんでした。たしか明治38年であったと思う。乗松兄が朝鮮を立て日本に帰られる時、水原で送別の会がありました。日本人で集められた者は私一人でした。他はことごとく朝鮮人で、20里30里（日本の2里3里）の遠方から草履ばきで集まってくる。朝鮮



の兄弟らは涙を流して別れを惜しんだ。之を見て、私の心は非常に動かされました。明治37・8年の朝鮮の有様では、ほかに日本人の帰国を惜しむようなことはない。…多数の朝鮮人が水原の停車場に集まって、涙を流して乗松兄に別れを惜しんだには、感動せずにおれませんでした」（『喜音』259号、1969、9）。

⑫ 「水原集会所の土地は金泰貞兄が寄付せられ、兄弟らが金銭、もしくは物資の寄付をせられ、あるいは労力をもってして、8月2日から建築に着手し、40余日にして大集会に間に合った。場所は水原の有名な華虹門の前に見て…」

⑬ イ 乗松の手紙より 「李大王殿下（高宗）の国葬前後に、朝鮮人の中には不穏騒擾のことなければよいがとは、だれしもおもしろいようであったが、一日に大漢門前、その他のところにて、独立万歳など叫び、不謹慎の軽挙妄動をなす群れもありて官憲の方にてても心を勞し、鎮撫に従事せられし状態ゆえ、今日福音の書き物など配布することは、いかがやと多少懸念なきにもあらざりしが、信仰と善き良心を以て主のみ名を言いあらわし、福音のまことのみちを伝うるにおいて、さらに臆すべきにあらざるをもって、福音書冊を分与せしに何らの妨げなく…。ご葬儀のあとにもなお不穏の挙動をなす人々もあり、また男女学生の拘留せられしもの少なからず、彼らは一部の人々の教唆するところとなりて、年少客気にまかせ、不謹慎の行動におちいりしことなるべし。気の毒なる次第…」

ロ 閔庚培『韓国キリスト教会史』（金忠一訳、新教出版社）「この独立運動は、宣教師たちには驚きそのものであった。誰もがそのようなことを期しなかったばかりでなく、韓国人がそのような大事をなす能力があろうとは夢にも考えられなかった。手には何も持たず、拳だけをギョッと握りしめて抵抗もしない白衣の民族が（日本の）ありとあらゆる暴悪な残忍のために倒れていく姿を眼前に見ながら、また、無差別乱射の弾に当たって倒れていくといったことが、今日も明日も、この国の至る所で行われていることを知りながら、何もできないとは、気も狂わんばかりである」

⑭ 堤岩里教会事件（インターネット）「最近発見された当時の朝鮮軍司令官・宇都宮太郎の日記によれば、『事実を事実として処分すれば尤も簡単なれど』とし『虐殺、放火を自認することと為り、帝国の立場は甚だしく不利益』となるという判断から、幹部と協議した結果、『抵抗したるを以て殺戮したるものとして虐殺放火等を認めることに決し、夜には散会す』とある」。

⑮ イ 「1919年3月1日に朝鮮半島で独立運動が勃発します。日本では『万歳事件』などといって小

さく扱っていますが、全朝鮮半島をゆるがす反日運動でした。たまたま乗松さんがソウルにいて、いつものようにトラクトを配ったり、福音を伝えるだけでした。欧米の宣教師が独立運動を支援したのにくらべ、乗松の態度は生ぬるいと批判できますが、彼は日本帝国主義に反対しませんでした。お先棒もかつぎませんでした。朝鮮総督府から機密費をもらって伝道していた組合教会の渡瀬常吉牧師とはわけが違います」

口 乗松が3・1運動時に書いた『福音時報』（1919.10.10号）「血を流しし罪」と題する文章の内容を紹介しつつ、「ここには3.1独立運動の膨大な死傷者、とくに自らが20年近くいた水原の堤岩里虐殺事件で流された、非道の血について何らの言及がない。乗松とその群れの信仰は、基盤を日常の平安を望む小市民階層に置き、自らをむなしくし、キリストを唯一の支点として、懸命に生き抜こうとする純粋な正統的信仰であるが、差別に抗し権力に抗する、はげしいキリストの一面への信従には消極的な、求心的内的な信仰であった。したがって、上なる権威にさからうことは神の定めにもとることであり、体制に抗して闘う社会運動、独立運動などは、全く思いもよらぬことであった。こうした乗松にとって、昨日までのおとなしく従順な朝鮮人を、はげしく一変させ、爆発的に朝鮮全土に広がっていく3・1独立運動は、危険極まりない軽挙妄動としかうつらず、一部過激分子の教唆によってなされているとしか理解できなかったのであった。これは天皇への素朴な崇敬心を持ちつづけ、膨張を続ける明治国家に、声高な意義申立てもなく追従していた、平凡な一国民としての明治人乗松の、当然の限界であった」

⑩ イ 臨終に間に合わなかった金大熙は「キリストの愛に励まされて、乗松兄は朝鮮の人を愛しました。世の中には英国人になりたい人たくさんあります。米国人になりたい人たくさんあります。けれども乗松兄は朝鮮の人になりました。この愛はいかなる愛でありましょうか、…死ぬまで朝鮮、朝鮮といって天へ往ってしまった…。そして骨壺に入りきらなかった乗松の骨片を灰とともにすべて持ち帰ったのである。

口 小田原での火葬場での様子。『先輩兄弟ら（大正編）』「そのいのちも、骨まで朝鮮の人々のために与えんとした日本人と、その日本人の骨までもらいたいという朝鮮人と、まことに不思議な光景であった。そもそも乗松兄の病あつしと聞くや、朝鮮の兄弟ら、はなはだ憂い『いま一度乗松兄を見たし、いま一言多年の恩を謝したし』と願うもの多く、ふつうの朝鮮人も『かくまで朝鮮人に慕われる日本人は、そも何者であるか、日本人が日本に帰って病んでいるのに、多数の朝鮮人がわざわざ朝鮮から見舞いに行きたいとは。人間と生まれてかくのごとく敬慕することを得ば、名誉も財産も何もいりません』と感激したという。朝鮮で死んでも

遺骨は日本に持ち帰る人が多いのに、日本で死んで遺骨を朝鮮に葬る乗松兄のごときは、おそらく前例のないことであった」。

- ⑰ イ 「大正11年4月14日。快晴。萬花薫る朝、華虹門内の聖書講堂から朝鮮式の葬列で、朝鮮信徒に担がれて華虹門外光教里の松林にある墓地に運ばれた。すでに三メートル位深く掘り、真白き朝鮮紙を敷かれた墓穴におろし、コンクリートで周囲をかこまれた処に葬り、朝鮮式の土饅頭がつくられた。墓前に『在主故乗松雅休兄姉記念碑』が建てられ、感謝祈祷、讚美が主にささげられた」。

ロ 「生きるも主のため、死ぬるも主のため、始め人のため、終りも人のため、その生涯まごころをつくして愛し、おのれ主の使命を帯びて、その一切の所有をすて、夫婦同心、福音を朝鮮に伝う。数十年の風霜、その苦しみいかに。心肺は激しくいたみ、皮骨は凍え餓え、手足は痛みそこなわれ、改めず、その生涯は祈祷と感謝なり。わが多くの兄弟を得、同じく主に会し、主の名は栄えを得。その生涯、苦にしてまた栄えなり。臨終の口に朝鮮兄弟のこと絶たず。その骨を朝鮮に残さんことを願う。これわれらの心碑となすゆえん。しこうして主の再臨の日に至るなり」

ハ 上田貞治郎「墓石は質の良い立派なもので、しかも建碑の費用一切をそれほど裕福ではない朝鮮の兄弟らが喜んで負担したことは、いかに朝鮮兄弟らの愛が深いかを示している。ゆえに碑石は冷たい一片の石でなく、燃ゆるがごとき朝鮮兄弟らの心に刻みつけられた愛の記念碑である」

二 日本人は朝鮮で死んでも骨は日本へ持ち帰るのに、日本で死んで骨を朝鮮に埋めた乗松は、いかに朝鮮を愛したことかと同時に人々を驚かせた。日本人の記念物が神社をはじめ根こそぎ破壊された朝鮮で、乗松の記念碑は水原のキリスト同信会の会堂裏の丘の中腹にひっそりと建っている。(写真)

- ⑱ イ 佐藤得二「乗松氏は伝道といっても牧師でも先生でもありません。お互いにヒョンニム（兄弟）と呼ぶ人たちです。これが世間に目立たないプリモス・ブレズレンの教えです。乗松氏が朝鮮人を教化したとか、指導したとかいったら、乗松氏も兄弟たちも怒るでしょう。彼が内朝融和のために尽くしたなどというのも見当ちがいの評言です。彼はキリストのことばに活かされ、韓国の兄弟たちを慰めに行き、朝鮮人になり切って死んだのです。貧しい兄弟たちの負担になるのが苦しくて日本に帰って死んだのです」

口 詩人：李烈 「…乗松兄弟は、韓国の独立運動に反対することも、日本統治に協力することもしませんでした。彼は当時、植民地統治下で望みを失って生きていた韓国の人々に、この世のくよりも永遠のみくに、朽ちゆくいのちよりも永遠のいのちの福音を伝道することを使命として、34歳の年に韓国へ単身やってきて、結核にかかり59歳で世を去るまでの25年間、だれよりも韓国の人々を愛して、キリストの愛をみずから実践した偉大な信仰者でした…」

※ … … … ※ … … … ※ … … … ※ … … … ※ … … … ※

◎第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白 「…わたくしどもは〈見張り〉の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し…、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と、兄弟姉妹、…ここからのゆるしを請う次第であります。

……1967年 総会議長 鈴木正久」

◎明治学院の戦争責任・戦後責任の告白 「私は、日本国の敗戦50周年にあたり明治学院が先の戦争に加担したことの罪を、主よ、何よりもあなたの前に告白し、同時に、朝鮮・中国をはじめ諸外国の人々の前に謝罪します。……1995年 明治学院学院長 中山弘正」

## 韓国近代文学の祖・李光洙

新潟県立大学名誉教授 波田野節子

李光洙(1892～1950?)の略歴

西暦(数え年)	
1892年(1歳)	2月に平安北道・定州郡で生まれる
1894年(3歳)	7月、日清戦争(～1895)
1896年(5歳)	ハングルと千字文を習う
1897年(6歳)	上の妹が生まれる 10月、国号が大韓帝国になる
1902年(11歳)	8月、父母がコレラで急逝。親戚の家を転々とする半放浪生活を送る
1903年(12歳)	東学教徒の伝令として働く
1904年(13歳)	2月、日露戦争が始まる(～1905)
1905年(14歳)	東学の留学生として来日。東海義塾に通って試験準備
1906年(15歳)	4月、神田三崎町の大成中学校に入学するが、夏に学費がとぎれて帰国
1907年(16歳)	皇室留学生として再来日。9月、明治学院中学3年に編入学
1908年(17歳)	4月、4年に進級。山崎俊夫と同級生になる
1909年(18歳)	12月、『白金学報』に「愛か」が掲載される
1910年(19歳)	多くの初期創作。秘密雑誌『新韓自由鐘』第3号発行。中学を卒業して五山学校に赴任。8月、日韓併合
1911年(20歳)	1月、105人事件で五山学校校主が逮捕される。学校運営が教会の手に移る
1912年(21歳)	校務に専念するが教会と対立
1913年(22歳)	2月新文館より『アंकルトム』抄訳を出す。学校で排斥運動がおき、11月大陸放浪の旅に
1914年(23歳)	上海からウラジオストックを旅する。チタに滞在中、ロシアが第一次大戦に参戦して帰国
1915年(24歳)	8月、長男誕生。9月早稲田大学予科入学
1916年(25歳)	4月、早稲田大学入学。9月より『毎日申報』にたくさんの論説を発表して脚光を浴びる
1917年(26歳)	結核発病。1月『無情』。7月『五道踏破旅行』(日・韓)。10月『開拓者』
1918年(27歳)	10月、許英肅と北京に駆け落ち 11月第一次大戦終結
1919年(28歳)	東京で2・8独立宣言起草。上海亡命。臨時政府樹立に参加。安昌浩の興士団思想を知る
1920年(29歳)	興士団に入団
1921年(30歳)	4月、帰国して逮捕されるが不起訴。許英肅と再婚
1922年(31歳)	2月、修養同盟会を立ち上げる。5月、「民族改造論」発表
1923年(32歳)	5月、東亜日報入社。9月、関東大震災
1924年(33歳)	このころ日本訪問。10月、「朝鮮文壇」主宰。『再生』連載が大ヒット
1925年(34歳)	3月、脊椎カリエスで手術を受ける
1926年(35歳)	1月、修養同友会となる。6月に入院。11月、東亜日報の編集長に就任

1927年 (36歳)	1月、結核再発。 5月、次男鳳根誕生
1928年 (37歳)	7月、病勢回復
1929年 (38歳)	5月、腎臓結核で大手術。7月、修養同友会を同友会と改称。9月、次男の栄根が生まれる
1931年 (40歳)	9月、満州事変
1932年 (41歳)	満州建国。4月に安昌浩が逮捕される。5月、『改造』の山本実彦と会食。9月、東京に滞在して日本文人と交流する。安昌浩に懲役4年の判決
1933年 (42歳)	8月に東亜日報を辞任して朝鮮日報副社長に就任。9月、長女廷蘭が生まれる
1934年 (43歳)	2月、鳳根が敗血病で急死する。朝鮮日報を辞任し、家を建てて隠遁
1935年 (44歳)	1月、次女廷華が生まれる。年末、研修に行った妻と子供に会いに日本へ(～1月)
1936年 (45歳)	5～6月、日本に滞在。『改造』に「萬爺の死」を発表する
1937年 (46歳)	6月、同友会事件。7月、日中戦争。12月、病保釈
1938年 (47歳)	3月、安昌浩死亡。8月、裁判が始まる。11月3日、思想転向会議を招集、会員らと裁判所に思想転向申述書を提出して朝鮮神宮を参拝する
1939年 (48歳)	9月、第2次世界大戦。12月、同友会事件で全員無罪判決を受けるが、検事側が即日控訴
1940年 (49歳)	2月、香山光郎と創氏改名。同日、朝鮮芸術賞を受賞。8月、朝鮮語新聞が廃刊。同友会事件で全員有罪判決を受けるが上告。この年、モダン日本社から翻訳4冊が出る
1941年 (50歳)	11月7日、同友会事件で全員無罪の判決。12月8日、太平洋戦争
1942年 (51歳)	11月、東京で第1回大東亜文学者大会に参加
1943年 (52歳)	11月、半島出身学生に志願を勧めるために東京へ
1944年 (53歳)	隠遁。11月、南京で第3回大東亜文学者大会
1945年 (54歳)	8月15日、日本敗戦を隠遁先で迎える
1947年 (56歳)	『島山安昌浩』『私・少年篇』
1948年 (57歳)	随筆集『石枕』『私・二十歳の峠』『我が告白』
1949年 (58歳)	反民族行為処罰法により収監、病保釈、不起訴
1950年 (59歳)	6月に朝鮮戦争勃発。平壤に強制移送されたあとの消息は不明
1991年	米国在住の次男李栄根が北朝鮮に行き、1950年秋に肺結核と凍傷のため死亡と聞かされる
2009年	盧武鉉政権下、日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法（親日反民族特別法）により、親日反民族行為真相糾明委員会が決定した親日反民族行為者301人の1人として認定される

# 教育と伝道の使者 —S・R・ブラウン博士—

教養教育センター客員教授 中島耕二

## はじめに

昨今、明治学院では学院の創立者としてヘボン博士を単独で掲げる傾向にありますが、学院創設に貢献した人物として、本日紹介するS・R・ブラウン博士の名前を外すことはできません。ブラウン博士は滞日20年、その間教育と伝道の使者として日本の近代化に大きな足跡を残しました。博士の名はキリスト教界や明治学院内に止まらず、広く日本社会全体において記憶されてしかるべきと考えます。

## 1. 誕生から中国出発まで(1810年～1838年)

### (1) 生い立ち、会衆教会 (Congregational Church) に通う

サムエル・ロビンス・ブラウン(Samuel Robbins Brown) は、1810年6月16日、アメリカ・コネチカット州イースト・ウインザー (East Windsor, Connecticut)で、父テモシー・ヒル・ブラウン (Timothy Hill. Brown, 1782~1853)と母フィーベ・アレン・ヒンズデール・ブラウン(Phoebe Allen Hinesdale Brown, 1783 ~ 1861)の長男として生まれた。兄弟姉妹として姉と弟が一人ずつ、妹が二人いた。幼少のサムエルに感化を与えたのは母のフィーベであるが、彼女は2歳の時孤児となり、親戚の世話を受けながら文学や詩を愛する少女に育ち、18歳の時回心して会衆教会の信徒となった。やがて1805年6月、22歳でペンキ職 (handyman) に携わるテモシーと結婚した。サムエルは幼児期の3年間をイースト・ウインザーで過ごし、シュアベル・バートレット (Rev. Shubael Bartlett, 1778~1854) 牧師が牧会する村の会衆教会に母に手を引かれて通った。1813年11月1日、一家は生活に追われ新天地を求めて同州エリントン(Ellington)に移った。ここでエリザベスとメアリー (Mary C. 1813~1873) の二人の妹が生まれ、父も信仰を告白して会衆教会信徒となった。1818年、母のフィーベはこの地で、日本でも有名な「わずらわしき世をしばしのがれ」(『讚美歌』319番)を含め7曲の讚美歌の作詞をした。しかし、ブラウン一家はこの地でも生計に苦しむようになり、父テモシーは新たな収入源を求め、1818年、サムエルが8歳の時マサチューセッツ州マンソン (Monson, Massachusetts) に転居した。

### (2) 学校生活 (マンソン・アカデミー、アマースト大学、エール大学)

マンソンの町には州内でも屈指の大学進学校であるマンソン・アカデミーがあった。この学校は1804年に設立され、会衆教会の協力のもとにあったが、教会と宗教上の特別な関係はなかった。それでも伝道に関心を抱く生徒が数多く学び、1824年、14歳のサムエルもその一人に加わった。隣接の会衆教会 (Monson First Congregational Church) における日曜学校では、146人の生徒が通い「聖書、讚美歌および教理問答」の暗誦が宿題として課せられ、サムエルは聖書の750節を暗誦して二番の成績を残した。

サムエルは4年間の学業を終え、家計を助けるため臨時教員となり、収入の全額を父に渡した。



エール大学

やがて、将来伝道者になる夢を叶えるために、大学進学  
の希望を父に伝え、卒業後父の負債を肩代わりする  
ことを約束し、1828年の初夏会衆教会系のアマースト  
大学の入学試験を受けて合格した。学費を稼ぐため教  
師のアルバイトをして糊口を凌いでいたが、やがて、  
ニューヘブンに住む母の友人が、サムエルの学資の援  
助を申し出てくれ、サムエルはアマースト大学からコ  
ネチカット州ニューヘブンのエール大学に転校するこ  
とになった。アマースト大学は新島襄、内村鑑三、神

田乃武などが学んだ大学として知られている。サムエルはエール大学の第一学年に入学したが、学  
費を得るため、一、二年目は森に入って暖房用の薪の切り出しや音楽クラスで得意の声乐と器楽の  
指導をし、また学生食堂の給仕等に励み、三年次は寄宿舎の朝の鐘をたたき起床係に指名されて報  
酬を得、四年次はニューヘブンの男子校で音楽講師を勤め学費の全額を賄った。卒業の3ヶ月前の  
休暇には、ニューヨーク市の聾唖学校(The New York School of the Deaf)から招かれて講師を務めた。  
ちなみに卒業論文は「指話法」についてであった。サムエルはニューヘブンで多くの良き友人  
を得て、1832年にエール大学を卒業した。

ここまでのサムエルの成長過程を見ると、母から信仰心を吸収し、聖書と讃美歌から霊的な感性  
を授かりほほ笑みを絶やさず、父からは貧しくとも真摯に努力することを学び、加えて長男として  
の義理堅さと独立心を持った青年に育ったことが分かる。加えてサムエルはユーモアも持ち合わせ  
ていた。

### (3) ニューヨーク聾唖学校教師、南カロライナ州コロンビア神学校入学

大学卒業後は神学校への進学も考えたが、父との約束があり、また神学を学び福音伝道者を目指  
すには社会的経験が足りないと自覚し、聾唖学校の教師を続けることにした。3年間この学校に勤  
め父との約束を果たした頃、ひどい急性肺炎にかかり療養のため南カロライナ州コロンビアに移り、  
この機会に同地の長老教会が経営するコロンビア神学校に入学した。学費は同町の女学校で声乐と  
器楽を教えて確保した。この学校の教え子にのちにアメリカ聖公会初代中国主教なったブーン師夫  
人や第26代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの母となったミス・マーサ・ブロック (Martha  
Stewart Bulloch) などがいた。

### (4) ニューヨーク市ユニオン神学校へ転校、マンハッタン・アレン通り長老教会信徒

健康を取り戻したサムエルは、ニューヨーク聾唖学校から良い条件で教師のオファーが届いたこ  
ともあり、1836年再びニューヨークへ戻り、まだ創立して間もないユニオン神学校に転入した。こ



の神学校は長老教会系ではあったが、設立発起人の多くはニューヨークのクリスチャン実業家たちという特徴を持ち、この思想はサムエルに実業家たちを伝道の協力者として親近感を抱かせることになった。サムエルは5番街の聾啞学校で教えながら神学を学び、アーレン通り長老教会（Allen Street Presbyterian Church）の会員となり、その合唱隊の指導を熱心に続けた。

## 2. 中国伝道時代(1838年～1847年)

### (1)結婚、按手礼受領、マカオ・モリソン記念学校校長就任

1834年8月1日に初代中国プロテスタント宣教師のロバート・モリソンが亡くなると、在中国（清）のアメリカ人クリスチャン商人たちが彼の遺徳を偲び、マカオに「モリソン教育協会」を設立し、中国人青少年にキリスト教にもとづく学校を建てることを計画した。1838年10月、資金の準備も出来、商人の代表は校長の推薦をエール大学の3人の教授に依頼した。10月4日同大学の卒業生であるサムエルに白羽の矢が立った。ところが、中国に向かう「モリソン号」は、同月16日にニューヨーク港を出航することが決まっていた。サムエルは12日間のうちにオファー受諾の可否と諸々の準備を整える必要があった。早速、生まれ故郷のイースト・ウインザーにバートレット牧師を訪ね、その娘である婚約者のエリザベスに地の果てまで一緒に行ってくれるかどうかを確認し、同意を得ると聾啞学校に辞職願いを提出し、10月10日にはエリザベスと結婚式を挙げ、14日にアーレン通り長老教会で按手礼を受領し、17日の朝アメリカン・ボードの宣教師として、モリソン号の船上の人となった。

モリソン号は喜望峰を回り、125日の航海の末、1839年2月18日にマカオ沖に到着し、翌朝、在中国のアメリカン・ボード宣教師S・W・ウィリアムスの出迎えを受けた。しかし、当時の清はアヘンと外国人女性の入国は禁止していたので、エリザベスはサムエルの手荷物という方便によってようやく入国が認められた。ブラウン夫妻の到着は、モリソン教育協会会長のリオネル・デントから大歓迎を受け、早速秋からギッツラフ宣教師の持家を夫妻の住居兼校舎として借り受け、「モリソン記念学校」が開校となった。生徒は6人、寄宿舎と衣類が支給され授業料も無償であった。

### (2)香港、帰国、中国人青年3人を同行

サムエルは午前中に中国語を学び、午後と夕方に英語を教えた。生徒たちは音楽に興味を示し、サムエルも音楽が靈感を与え心の安定に効果があるとして、積極的に英語で讃美歌を教えた。また、生徒用に英語教科書を自ら編集した。1840年2月18日、待望の長女が生まれJulia Mariaと名付けた。1841年に夫妻は7週間のシンガポール旅行に出かけ、同地で着任したばかりのアメリカ長老教会宣教師のヘボン夫妻と出会った。のちに二人は偶然、日本で20年間同僚として協働することになる。やがてサムエルと生徒たちは心を通わせるようになり、生徒たちはサムエルの母フィーベにまで手紙を書くようになった。1842年6月頃には生徒の数も16人に増えた。

アヘン戦争の結果、香港がイギリスに譲渡されると香港提督は、モリソン教育協会に香港のモリソン丘に新しい校舎を建てるべく土地を提供した。デント会長がこれに応え、3,000ドルを寄付し、同年11月1日に学校はマカオから香港の新校舎に移転した。この地で長男のRobert Morrisonが誕生した。

学校は1844年3月の時点で生徒数28名、寄宿舎費、食事それに授業料が無償であった。

ある日、学校を海賊が襲いサムエルは彼らの持つ槍で腕を刺され重傷を負った。海賊が学校内を物色している間、生徒、夫人や子供たちはニワトリ小屋に隠れ難を逃れた。こうした不安もあったが、サムエルは長く中国に止まって奉仕することを決意していた。ところが、1846年にエリザベスが第三子を出産しその子は間もなく召天、その後、俄かにエリザベスの健康が悪化して、遂に一家はアメリカに帰国せざるを得ない状況となった。

### 3. アメリカ帰国から日本出発まで(1847年～1859年)

#### (1) ローム・アカデミー校長、オワスコアウトレット改革教会牧師

ブラウン一家は1846年の冬香港を出航し、インド洋から喜望峰を回り翌年4月ニューヨークの港に着いた。この時、サムエルは教え子の黄勝（のち在米清国領事）、黄寛（のち外科医）および容閔（のち在米清国公使）の三人をアメリカに同行したが、彼らは一様にエリザベスのそれまでの親切に感謝と尊敬を示した。一行はニューヨークに滞在後、すぐにマンソンに向かった。留学生たちはマンソン・アカデミーに入学し、サムエルは牧師の職探しをはじめたが、1848年にニューヨーク州ローム（Rome）で、私立アカデミーの校長に招聘され一家は留学生を伴ない新任地に移った。学校は男女共学で初年度には310名の生徒を集めた。やがて、校舎も増築され600名を超す生徒が学ぶまでに発展した。しかし、サムエルは学校運営に満足できなくなり、1851年3月31日に校長を辞任した。

#### (2) オワスコレット教会とフルベッキ、アドリアンス、マニオン、キダーたち

程なくして、サムエルにサンドビーチ・オランダ改革教会から牧師の誘いがあり、彼はこれに応じた。サムエルは牧師のかたわら家族の生活を支えるため70エーカー（8万4千坪・・・横浜キャンパスの1.4倍）の農地を購入し、そこに大きな家を建て25名を定員とする寄宿学校を開いた。1853年12月29日に父が亡くなり、母フューベはサムエル一家と暮らすようになった。教会はサムエルの努力で復興し、教会員の中から海外伝道を希望する女性たちが生まれた。キャロライン・アドリアンス（最初の来日女性宣教師）、メアリー・エディー・キダー（フェリス女学院創立者）それにマリア・マンヨン（フルベッキ宣教師夫人）たちである。フルベッキも1856年にオーバン神学校に入学し、サンドビーチ教会で奉仕活動に従事し、サムエルから多くを学ぶ機会を得た。サムエルは教会のため世俗的な集会にも積極的に参加した。こうしたサムエルそしてエリザベスの婦人会の奮闘によって、サンドビーチ教会は1859年には、礼拝出席者260名、陪餐会員120名、日曜学校生徒130名に増加した。サムエルはまた、女子の高等教育機関の設立に努力し、自ら委員長として奉仕し、1855年

4月に大学名称を「エルマイラ女子大学」として、女子大学設立を果たした。アメリカ最初の認可女子大学の発足であった。

#### 4. 来日から第一回帰国まで(1859年～1867年)

##### (1)アメリカ・オランダ改革教会宣教師として出発 (1859年)

サムエルは中国から帰国後も中国の仕事に早く復帰したいという希望を抱いていたが、妻のエリザベスの健康がそれを許さなかった。そして、ペリーとハリスの努力によって日本への宣教師の派遣が可能となると、サムエルの開拓者精神と伝道精神が動き出し、1858年12月11日に中国でも日本でもどちらでも可能とし、「わたしが海外にゆくことは、ここにとどまっているより教会のためになる」と所属するオランダ改革教会海外伝道局に志願書を送付した。シモンズ夫妻とフルベッキ夫妻とともに日本派遣が決まると、サムエルはニューブランズウィック神学校を訪ね講演を行い、海外伝道を希望する神学生を鼓舞した。この中に、のちに同僚宣教師となるJ・H・バラがいたことは良く知られている。1858年5月7日、サムエルは妻、二人の娘と次男を伴ない、シモンズ、フルベッキ家族らとサープライズ号に乗り込みニューヨーク港を後にした。インド洋を横切りジャワに寄港し、香港、上海で旧友たちと再会し、宣教師家族はひとまず同地に残り、一行はメリー・ルイザ号で日本に向かった。11月1日遂に神奈川に到着し、ヘボン博士の計らいで成仏寺の庫裏に旅装を解いた。

##### (2)神奈川成仏寺、『日英会話篇』の編集

1860年3月6日、総領事のハリスから招かれて神奈川領事のドールと初めて江戸を訪ねた。サムエルは日本語教師の斡旋を依頼した。時は尊王攘夷運動のさ中でもあり、ハリスは宣教師の安全を考え、サムエルを公使館付き牧師に任命し、ヘボン博士も同様に公使館付き医師に任命された。3月11日の主日には再びアメリカ公使館に呼ばれ礼拝の司式を行った。成仏寺ではサムエルの奉仕によって、ヘボン夫妻をはじめ横浜の英米人を加えて日曜日ごとに礼拝が捧げられた。語学にも秀でたサムエルは来日以来『日英会話篇』という大部の教科書の編集を進めていた。この著作は1863年に上海の美華書館で印刷されたが、その費用は横浜のスコットランド商人から、そしてサムエルの横浜・上海往復の船賃はユダヤ人紳士から無償で提供された。やがて、幕府から安全のため神奈川を去って横浜居留地に移るよう督促が寄せられた。しかし、オランダ改革教会では南北戦争の影響で献金が減り、居留地の土地を借りる予算がなかった。その時、横浜の英米紳士24名から、サムエルの礼拝奉仕への感謝として妻のエリザベス宛てに多額の支援金の申し出が寄せられ、伝道局の窮状を救った。1861年10月10日、最愛の母ヒューベが本国でなくなった。78歳であった。

##### (3)横浜英学所、聖書翻訳開始、切支丹禁制の高札撤去の努力、横浜居留地自宅の焼失

1862年、神奈川奉行所は運上所の役人その子弟の英学教育の学校を開き、在横浜の宣教師に講師



ニューヨーク市立大学

を依頼してきた。宣教師たちは日本人青年たちとの接触の場となることからこれを引き受けた。アメリカ・オランダ改革教会からサムエル、J・H・バラ夫妻、アメリカ長老教会からヘボン博士夫妻、タムソンが教師を務めたが、これは改革・長老教会の協働の教育事業となり、謂わば明治学院のプロト・タイプでもあった。学生として、大鳥圭介（学習院長、貴族院議員）、谷田部良吉（東大教授）、星亨（逓信大臣、衆議院議長）、安藤太郎（ハワイ総領事）、塚原周造（東京商船学校長）、粟津高明（海軍兵学寮教授）、高松凌雲（医師）、三宅秀（東大初代医学部長）、益田孝（三井物産創設

者）等が学んだ。学校は1866年火事で校舎を焼失し、財政難のため間もなく廃校となった。

サムエルは来日後早くから聖書の翻訳を進めていたが、1863年には四福音書と創世紀の和訳をほぼ終了した。政局は年ごとに尊王攘夷運動が高まり騒然とする中で、サムエルはいち早く信教の自由を求めて、幕府の切支丹禁制の高札撤去に努力することを誓い、その声明書を欧米各国の福音同盟会に発送した。サムエルは世俗世界にも強い関心を持っていた。

1867年5月、横浜の大火（豚屋火事）によって、サムエルの自宅が全焼し聖書の翻訳原稿も焼失した。幸いマタイ伝とマルコ伝は友人に貸し出していて焼失を免れたが、家と研究書籍全てを失ったことから、本国に帰る決心をした。この頃、ニューヨーク市立大学は、サムエルに神学博士号を贈ることを決定していた。

## 5. アメリカ帰国と再来日(1867年～1869年)

アメリカに戻っても、帰国宣教師には中々働き口がなく、サムエルは再び日本派遣を伝道局に申し入れた。1869年1月15日付けで長女ジュリアの夫で、イギリス新潟領事を務めるJ・C・ラウダーから新潟英学校教師の誘いの手紙が届いた。年俸3,000ドル、渡航費支給の条件であった。幸い伝道局の許可が降り、その時伝道局から初代女性宣教師として派遣されたミス・メアリー・キダーを伴ない、7月末夫妻は再び日本に向け出発した。今回は大陸横断鉄道と太平洋航路により、8月26日に横浜に到着した。

## 6. 再来日から帰国まで(1869年～1879年)

### (1)新潟英学校、横浜修文館における英語教育

1869年10月6日、新潟英学校赴任のためキダーを伴って、横浜を出発した。途中安中で新島襄の父親と会見した。新潟英学校ではキリスト教を教えたことにより問題となり、翌年6月に辞任し、

生徒の真木重遠を連れて横浜に戻り山手211番に自宅を構えた。9月11日から3年契約で神奈川県立修文館の教師となった。生徒には、真木重遠（上田教会牧師）、吉原重俊（初代日銀総裁）、小野梓（自由民権家、早稲田大学創立者）、中浜東一郎（東京衛生研究所長）、都築馨六（外務次官、枢密顧問官）、前田利嗣（旧金沢藩主）、松平定敬（旧桑名藩主）、松平定教（旧桑名藩主）、駒井重格（東京高商校長、専修大学設立）、諏訪頼敏（専修学校塾監）、川俣英夫（烏山藩、教育者）、大関増勤（旧黒羽藩主）、佐久間信恭（札幌農学校三期生、英学者、五高教授）、佐藤昌介（札幌農学校一期生、北大総長）、宮部金吾（札幌農学校二期生、北大教授）、植村正久（明治学院教授、富士見町教会牧師）、押川方義（東北学院長）、井深梶之助（麹町教会牧師、明治学院総理）、白石直治（東大教授、土木学会会長、関西鉄道社長）等俊秀が集まり、サムエルの教えを受けた。

## (2)横浜ユニオン・チャーチ、日本基督公会設立への尽力

修文館での井深梶之助との出会いは神の采配であった。苦学を続ける優秀な学生を思うサムエルの心情は、かつての自分の投影であった。井深とサムエルは深い師弟の関係で結ばれた。やがて井深は恩師から洗礼を授かり、サムエル、J・H・バラたちの指導によって設立された日本基督公会（横浜海岸教会）の信徒となった。

## (3)ブラウン塾開設、東京一致神学校（のちの明治学院神学部）開校

1873年8月、修文館との契約が切れ、条件が合わず更新をしなかった。アメリカ留学を目指す旧桑名藩主松平定教はサムエルの指導継続を嘆願し、その交渉を井深梶之助に託した。井深は避暑先の箱根にサムエル訪ね、私塾の開設を依頼した。授業料一人月額10円を条件にサムエルは松平の希望を呑んだ。

秋からブラウン塾が始まった。生徒には、松平定教、駒井重格、諏訪頼敏、白石直治、島田三郎（衆議院議長）、前田利嗣、植村正久、押川方義、井深梶之助、本多庸一（牧師、青山学院長）、柳本通義（札幌農学校一期生）、藤生金六（自由民権家、牧師）、雨森秋成（教育者・事業家）、山本秀煌（牧師、明治学院教授）等旧修文館の生徒に加え、神学を目指す生徒が集まった。塾は次女のハティと姪のハリエット・ウインも手伝い、やがてミラーやアメルマンたち宣教師が指導し、英学一般から神学教育に中心が移っていった。そして、1877（明治10）年10月7日に、築地居留地に東京一致神学校が開校し、ブラウン塾の神学生は同校に転校していった。

サムエルは1878年に旧約聖書和訳委員会が組織されると、委員に選ばれたが体調が悪化したため、遂に帰国を決意した。

## 7. 帰国後から永眠まで（1879年～1880年）

サムエルが帰国後の1880年、新約聖書全訳完成記念式が築地新栄教会で行われた。6月、エール

大学の同窓会に出席し、19日には故郷のモンソンに出かけ、両親の墓参を行った。翌20日、エール大学時代親友であった同級生宅に未亡人を訪問中急逝した。享年70歳と4日であった。その生涯は世界の教育と伝道に捧げられたものであった。

# 井深梶之助が目指したもの —理想と現実のはざままで—

明治学院大学教養教育センター 渡辺祐子

## 1 はじめに

井深梶之助（1854－1940）とは  
会津藩出身の武士の息子  
青年時代にキリスト教に改宗、その後牧師  
明治学院の第2代総理（1891－1921）  
明治期から昭和にかけてキリスト教会をリードした人物

## 2 井深の少年時代

会津藩士の子として漢学と国学の教育を徹底的に受ける。まさしくエリート教育。  
父は日新館奉行（館長）。母方の伯父は会津藩家老西郷頼母。

1868年（明治元年）1月 鳥羽伏見の戦い（戊辰戦争開始）。

4月 小出島の戦い（新潟県）。父の禁止を無視して無断で参戦。倒幕軍兵士を殺害。→ 罪意識の原体験となる。会津軍は惨敗、悲惨な敗走体験。

6月 いわゆる会津戦争開始。松平容保の小姓として鶴ヶ城に籠城。白虎隊投入。

9月 鶴ヶ城落城。西郷頼母の母、妻とその妹2人、娘4人、息子（2歳）の心中。その他多数の親せきも自害。

「その悲惨の状態は想像に余りある。……爾来星霜60年を経過した今日之を追想し来れば、まさに断腸の思いである」『その時代』Ⅰ、p.42.

「私は意識旺盛なる頃の先生にはいざ知らず、少なくとも晩年の先生のお言葉のうちに非常に多く会津に関するものの多かったことを思い出します。一日、ご危篤に陥られて意識もあるやなしと気づかされた場合、私どもは枕頭に待ってゐましたが、凶らずも話が会津のことに及びました。その会津というふ一言がお耳に達したものが今の今まで安らかな表情であった先生のお顔が急にはげしい悲しみの形相となり、今にも嗚咽するばかりになりました。私どもは驚きかつ感激したのであります。」『資料集』p.70.

## 3 井深の青年時代 キリスト教との邂逅

### 1) 学問への渴望

日新館は焼失。「焼け残った書庫中の書籍は悉く敵軍の掠奪する所となった」仮日新館に通い始めるが「史記、前後漢書等ただあるだけのものを精読する外に致し方は無かった。其の他には、詩を作り字を習うくらいの事で、課目としては極めて貧弱なものであった。そこで、自分は本当に学問するには此所に居ては到底駄目だと思った。是非共東京へ出なくてはならぬという決心を為した。」『その時代』Ⅰ、p.55.

1870年、上京

「かくて母君より与えられた二分金三枚を懐にして、忠僕菅井三之助を従え、草履履きで、奥羽本街道を江戸へと出て参り、日本橋小舟町のある下屋敷に脚をとどめました。時に明治三年四月十七日、先生まさに十五歳の寿であり、また先生の今日ある発端でありました。』『資料集』 p.65.

## 2) アメリカ人宣教師ブラウン (Samuel Robins Brown) との運命的な出会い

1871年、横浜修文館に学僕として入学。

＊中村敬宇（正直）『擬泰西人上書』（1872） 西洋人が天皇に進言をするという設定。

「文明の道はただに電信、鉄道、軍艦、大砲の如きものに許りあるのではなく、それ以上に大切なるは真の文明たるところの宗教というものである。それ故日本の天皇陛下もよろしく西洋文明の根本たるところのキリスト教を御採用になり、ますます日本国が真の文明の道に進歩することを希望して止まない。」⇒ 西洋文明の根幹をなすキリスト教に強い関心を持つ。

＊英語の教科書 Willison's First Reader

「修文館において英語の初歩教科書として用いたウィルソン読本中に、キリストがその周りを取りまく幼児等の上に手をおいて、祝福されて居る絵がありました。或日、それをもってブラオン先生に「このキリストという方はどういう方ですか」と訊ねますと、先生は不思議そうな顔で、チット見つめて居られましたが、「貴方はこの事を知り度いのですが。それなら、バイブルを説明して聞かせよう。それには日曜日の朝、居留地39番地にあるドクトル・ヘボンの診療所にいらっしゃい。そのためにバイブルを一冊あげましょう」と英語のバイブルをくださいました。』『その時代』 1、p.280-281.

⇒ ヘボン邸で行われていたブラウンの聖書講義と、友人の勧めで秘密裏に行われていたもう一人の宣教師J.バラの講義に参加。ブラウンの英語を理解できるほどの力はなく、日本語で講義しようとするバラは何を言っているのかわからない。

＊漢文のキリスト教書によってキリスト教教理の理解を深める。

『天道遡源』『真理易知』など、中国在住の宣教師が執筆した漢籍。

⇒ 武士の倫理（封建君主に対する徹底した忠誠）からの大転換を迫られる。

「是まで思ひも及ばなかったほどの、さらに大きな社会観、人生観があることを暗黙のうちに悟られました。」「是までは薩長に対し、復報するがために臥薪嘗胆、いかにもして勉学大成し



ようとのみ考えへていましたが、ブラウン先生の側にいますと、学問の真の動機はそんな小さなものではない、さらにさらに大きな博愛人道のためであると悟らしめられました。」(葬儀の際、鷺山第三郎が井深の述懐として紹介していることば)『資料集』p.66

1873年、ブラウンより洗礼を受ける。

「我が国では公然耶蘇教信者と成ると云う事には随分危険がある。次第に依ってはそれが為に、召捕えられて首を斬らるる様な事がないとも限らぬが、それでも洗礼を受けたいかどうかときわめて峻厳な質問であったが、自分は此れに対して言下に、固よりその覚悟はありますと答えた。」『その時代』1、p.73.

「『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』と云ええることあるを汝らきけり。されど我は汝らに告ぐ、汝等の仇を愛し汝等を責むる者のために祈れ。」(マタイによる福音書4章43節、44節。井深の回心を決定付けたともいわれる聖書のことば)

### 3) 神学を志す

ブラウン、修文館との契約が切れ同校辞任。井深ら学生の懇願により自宅で私塾を開く＝ブラウン塾1877年、ブラウン塾を母体のひとつとする東京一致神学校開校。井深入学。

## 4. キリスト者・神学者・牧師・教育者として生きる ～理想と現実の間を揺らぎつつ～

### 1) 結婚にまつわる逸話

ブラウン塾在学中父親から命ぜられた結婚話を断る。相手は父親の友人、旧藩の家老の娘。戦争後もかなり裕福な暮らしを維持していた。

「父上および母上の驚きと不興とは察するに余りあった。……子として之に従わぬは非常に苦しい事ではあるが、他事とは違う。止むを得ず断乎として之を拒絶した。而して色々とその理由を細かに認めて父上に陳情した。その結果、結婚の根本思想に就いて旧新の間に甚だしい相違のあることが明白に成ったが、とにかく、父のいったん貰うと約束したものを子が貰わぬという道理は無い。……思えば、未だ青二才の息子が、父に対して結婚の性質や夫婦の道に就いて弁ずる杯と云う事は、甚だ不自然の様であるが、急激な新旧思想交代の場合、且つ儒教思想と基督教倫理との衝突の場合、万止むを得ざる所で、今日より之を回顧しても、自分は敢えて其の道を過らなかつたと思う。……此の如き議論は、現在のいわゆる危険思想の類で以ての外の不心得、或は親不孝と見做された事かと想像する。……」

それでも親の面子をたてようと妥協案として梶之助が出した3条件

- ① 一度も会わずに結婚することには絶対に不服である

- ② 配偶者となる女性は、「新時代相当の教育」を受けていること
- ③ キリスト者であること

## 2) 文部省訓令12号問題 —キリスト教教育と国家—

条約改正（1894）に伴う外国人居留地の廃止と内地雑居

⇒ それまで居留地に留まっていたキリスト教の影響が一挙に全国に及ぶことを危惧する文部省は、1899年の条約発効を前に、“小中学校における宗教教育禁止”を盛り込んだ私立学校令を發布。禁止条項は「外交上の配慮」を理由に一旦削除されたものの「文部省訓令第12号」として公布される。

「……………学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ儀式ヲ行フコトヲ許ササルベシ」

宗教教育の維持 ⇒ 法令の規定外の学校とみなされ、「中学校」を名乗れなくなる。

= 上級の高等学校への進学・その間の兵役免除 二つの特典を失うことに ⇒ 学生募集に大打撃

キリスト教六学校内外代表者会議の開催（宣教師12名、日本人教員5名、うち明学から井深とインブリーはじめ4名の宣教師、計5名が出席）

- ・訓令12号の憲法違反を指摘
- ・キリスト教主義の堅持を確認

明学の対応：井深とインブリーが議論を主導。中学部を廃止（中学校の看板を下ろす）、普通学部となり、キリスト教教育を堅持。一方で井深や宣教師ら、文部大臣・官僚と交渉、「信教の自由」を根拠に「中学校の名前を放棄しても特典を保持すること」を要求。

1901年、明治学院普通学部、高等学校進学の権利回復

1904年、高等学校無試験入学指定校

中学校と同等の資格を回復させたが、他方、文部省の管理・監督を受け入れることに。

### おわりに

- \* 「汝の敵を愛せよ」
- \* 井深樞之助をアジアとのかかわりからとらえる意味

### 主な参考文献

『井深樞之助とその時代』Ⅰ～Ⅲ 明治学院1969～1971年

『明治学院百五十年史』明治学院、2013年

『明治学院歴資料館資料集 井深梶之助生誕150年記念号』第1集 明治学院歴資料館、2004年

研  
究  
所  
概  
要

月  
例  
研  
究  
報  
告

ラ  
ン  
ゲ  
ー  
ジ  
ラ  
ウ  
ン  
ジ  
活  
動  
報  
告

研  
究  
プ  
ロ  
ジ  
ェ  
ク  
ト

公  
開  
講  
座  
報  
告

研  
究  
業  
績

# 明治学院校歌と島崎藤村 —1906年の緑葉—

嶋田彩司担当

## ◇藤村に関わる毀誉褒貶、もしくは藤村文学についての好き／嫌い

\*芥川龍之介…彼 [芥川自身のこと：嶋田注、以下同] は「新生」の主人公ほど老獪な偽善者に  
出会ったことはなかつた（遺稿『或阿呆の一生』46）

\*正宗白鳥…『『新生』について]その恐怖焦慮煩悶が現実の人間苦として我々の胸を打つのだ（「島  
崎藤村」）

\*伊藤整は藤村の文体について、「物事を明確に言わず、暗示的に言い、しかも圧力が強く、強  
引である」（「藤村の発想方法」）というが、これを承けて剣持武彦は「この口ごもるような、はっ  
きりものを言いきらない表現に独特の詩を感じ風韻を感じるものは藤村の文学の好きな読者で  
ある。この文体にもったいぶった感情の誇張を読むものは藤村の文学の嫌いな人である」（「批  
評と論争」）と解説する。

## ◆明治学院校歌 作詞：島崎藤村 作曲：前田久八（東京音楽学校講師）

人の世の若き生命（いのち）のあさばらけ／学院の鐘は響きて／われひとの胸うつところ／白金  
（しろかね）の丘に根深く／記念樹の立てるを見よ／緑葉は香（にほ）ひあふれて／青年（わかもの）  
の思ひを伝ふ／心せよ学びの友よ／新しき時代（ときよ）は待てり／もろともに遠く望みて／おのが  
じし道を開かむ／霄（そら）あれば霄を窮めむ／壤（つち）あれば壤にも活きむ／ああ行けたたかへ  
英雄（おお）しかれ／眼さめよ起（た）てよ畏（おそ）るるなかれ

## ◆1906年の藤村と校歌の作詞

1906（明治39）年6月3日、明治学院の教諭兼同窓会の事務を受け持っていた宮地謙吉が、井深梶  
之助総理（現在の学院長に相当）の意向を受け、島崎藤村の居宅がある西大久保を訪ねて校歌の作  
詞を依頼した。

このとき藤村は34歳、家族は平屋一戸建て、六畳と三畳の小さな家に住んでいる。経済的に困窮  
し、妻冬（フユ）の実家から400円（自費出版の費用として）、信州佐久の素封家神津猛から150円（生  
活費として）の借金を背負っていた（当時公務員の初任給が月額50円）。

藤村は前年の4月に小諸義塾（現長野県小諸市）の教師を辞め、妻冬と三人の娘をつれて上京し  
たが、直後の5月6日に三女が急性脳膜炎で死去し（なお10月に長男が誕生している）、この年（1906）  
には4月に次女が急性消化不良にて死去、長女も危篤入院中であつた（6月12日に結核性脳膜炎で死  
去）。妻の体調も思わしくなく（栄養失調による鳥目等）、加えて夫婦の関係も円満とはいえなかつ  
た（後掲「水彩画家」『家』等を参照）。

一方、藤村は、1897（明治30）年の第一詩集『若菜集』をはじめとする詩作から小説への転身を  
試み、その成果として最初の長編小説『破戒』をこの年（1906）の3月に自費出版している。『破戒』  
は夏目漱石に「明治の最初の小説」と激賞されるなど大きな反響を呼び、これにより藤村は一流作

家としての文学的地位を確立する（藤村の自然主義作家としての地位は今日でも揺るがない）。

私生活上の不幸と文学活動の成功。文学のために子どもを犠牲にしたという風評も立った。1906年の藤村は明暗両面において特筆すべき生涯の一時期を迎えている。

宮地謙吉の校歌作詞依頼について藤村はつぎのように応えたという。[本学元教授平林武雄の「校歌制作の端緒」（1971年5月発行『白金通信』第27号）に拠る。平林は『白金学報』第9号（明治39年7月）を参照したが、嶋田は原本未見]。

とても堂々たる明治学院の校歌など作るの力なし。しかれども学院はわが母校、保育所、わが恩あるところなり。もし予の力にて及ぶことなれば、全力を尽してこれを編作せんこと、わが義務にしてまた名誉なり。予、快く諾せん。幸いに総理閣下以下の意に叶う良作を得ば、願はくはこれを常に歌ふて、学生の精神を鼓舞せられんことを希望に耐えず。（読みやすさを考え、一部漢字をかなに改め、句読点を補った。以下同）

#### ◆島崎藤村 略年譜

1872（明治5）

3月25日、筑摩県馬籠村（現岐阜県中津川市）に生まれる。四男三女の末子。本名春樹。島崎家は木曾街道馬籠宿の本陣・庄屋をつとめた家柄で、父正樹は十七代当主に当たる。明治維新により没落したが、伝統と矜持をもつ旧家に育った藤村には、上京後に身につけた近代的価値観と養育環境に由来する前近代的価値観が同居、併存しているといつてよい。

一族の多くは経済観念を欠いたまま事業に着手し、失敗して零落、精神上の病を得る者もでている。藤村は自らに流れる血筋に自覚的であり、日常においてことさらに慎重で計画的な生活を心がけていたとされるのも、奔放無軌道な血統への恐怖がそのような生活を強いたのかもしれない。

なお、父正樹には異母妹とのインセストがあったとされており（西方四方『島崎藤村の秘密』）、藤村は所謂「新生事件」（1912年参照）のち、「（父を）弱い人間の一人として、以前にまさる親しみをもつて彼の眼に映るやうに成った」（『新生』）と受けとめつつ、自らの中にも潜む激情（特に性的なもの）を「心猿」（煩惱や情欲のために心が混乱すること）の語をもって自覚し、苦しんだ（苦しむこと自体が藤村の生命力の根幹をなしていたともいえる）。\*容儀、礼節、これらのものは吾等に与へられたる高尚なる利器なり。…しかれども…枕をたたいて終夜眠るあたはざるに及んで池水 [心の水：嶋田注] 活動し、心猿悲鳴す。（1895年の随筆「村居謄筆」）

\*厳粛な宗教生活を送つた人達の生涯を慕ふ傍から、自分の内部に萌して来る狂じみたものを、自ら恣にしようとしてしかもそれが出来ずに苦しんで

るるやうなものをどうすることも出来ないやうな心が起つて来た（『桜の実の熟する時』）

藤村の親友蒲原有明は「藤村君の言葉はいつものとほり結局は限りなき人生の愛慾といふことに落ちていつた」（『飛雲抄』）といい、田山花袋は「島崎君ぐらゐ性慾に苦しんだ作家はないと言つて好いだらうね。…島崎君の作は、どれを繙いて見ても、性慾の匂ひが盛にしてゐるぢやないか」（『近代の小説』）と書く。また、評論家の平野謙は「藤村ほど石橋をたたいてわたった要心深い人もいなければ、また藤村ほど大胆に身をすててその生涯の曲がり角を通過した人もない」と評している。

- 1881（明治14）10歳 姉夫婦を頼って上京、有楽町の泰明小学校に転入。
- 1886（明治19）15歳 父正樹、皮相な文明開化の世相に憤りつつ狂気に陥り、馬籠の座敷牢で死去（『夜明け前』の青山半蔵のモデル）。  
藤村、木村熊二（台町教会牧師。女子教育の先駆者として明治女学校を創設。のちに信州小諸に小諸義塾を開校する）から英語を学ぶ。
- 1887（明治20）16歳 明治学院に入学（～1891）。ミッションスクールの華やかな生活を楽しむ。明治学院は、東京一致英和学校、東京一致神学校、英和予備校が合同して開校し、この年白金に新校地がひらかれた。藤村は第一期生として入学した。なお、藤村在籍中の校歌は、和蘭改革派教会によって開校されたラトガース大学（アメリカ・ニュージャージー州）の校歌の歌詞を一部入れ替えたもので、メロディも同一であったとされている。  
\*何事も自分の為たいと思ふことで為て出来ないことは無いやうに見えた。  
…彼は自分の好みによつて造つた軽い帽子を冠り、半ズボンを穿き、長い毛糸の靴下を見せ、輝いた顔付の青年等と連立つて多勢娘達の集る文学会に招かれて行き…（『桜の実の熟する時』）  
ただし、1889（明治22）年を境に、藤村は一転して無口で内向的な生活態度をみせるようになる。一説には第一高等中学受験の失敗が原因とも、享樂的な生活を友人に注意されたからともいわれている。  
\*今まで自分が思考して居たことは皮相に過ぎなかつたと思つて、文学とか宗教とかいふ方に心を潜めるやうになつてしまつた。（『明治学院の学窓』）  
\*僕は…一時はもう誰にも口を利くまいと思つた。（『桜の実の熟する時』）
- 1888（明治21）17歳 木村熊二によりキリスト教の洗礼を受ける。  
\*年の頃およそ五十ぐらゐで親しい先生のやうでもあれば可畏（こは）いお父さんのやうでもある肉体を具へた神であつた（『桜の実の熟する時』）

- ただし、藤村の信仰心については疑問を呈する声が多い。1893年の輔子との恋愛と辞職に際して、教会を離脱している。
- 1892（明治25）21歳 明治女学校の英語教師になる。教頭の巖本善治のつてで『女学雑誌』に投稿するようになり、その縁で北村透谷と知り合う。
- 1893（明治26）22歳 教え子佐藤輔子に愛情を寄せるが、婚約者のいる女性との恋愛は断念せざるを得ず、やがて辞職。  
関西漂泊の旅に出る。なお、佐藤輔子は翌年嫁ぎ先の札幌で病死。  
この年、『文学界』（浪漫主義を代表する文芸雑誌。透谷、藤村の他、戸川秋骨、馬場孤蝶等、明治学院の同級生も同人であった）創刊。
- 1894（明治27）23歳 明治女学校に復職。5月、北村透谷自殺。
- 1896（明治29）25歳 東北学院の教師となり、仙台に移住。詩作にふけり、優れた近代詩を『文学界』に発表する。後に、藤村はこの仙台時代を「春」や「生の曙」の語で振り返っている。藤村の生涯（前半）のなかで、もっとも心安らかな時期であった。
- 1897（明治30）26歳 上京。第一詩集『若菜集』。明治ロマンチズムの達成として名高い。自然の運行と人生を重ね合わせて、「春」の賛歌を歌い上げたもの。『若菜集』こそは藤村の青春であった。しかし、そこに「夢」「春の夜の夢」の語が頻出することを見逃せない（夢は醒めてのちにはじめてそれとわかる。しかし醒めてのち、夢の時間への再度の参入はかなわない）。
- 1899（明治32）28歳 小諸義塾の教師（英語・国語）となる。冬子（22歳）と結婚。冬は函館の裕福な網問屋の娘で、藤村にとっては明治女学校の教え子にあたる。父秦慶治は明治学院の有力な後援者の一人であった。  
\*折目正しいじみな木綿のお着物で風呂敷包みを抱き…静にお通ひになるお姿を、かはるがはるその硝子からのぞいて見ては、「えらい先生だつていふよ、詩集が出てゐるつて、こんな田舎などへいらつしやる先生ではないんだつて」などと驚異と尊敬をこめて話合つたことでございます。（当時を知る小諸住民の述懐。塩見鮮一郎『破戒という奇跡』からの転載）  
\*小柄の細つそりとした、お顔も細面の若く美しい方が、手桶に水を入れて重さうにさげて行かれます。…毎日水汲みにお通りでした。（同上）  
やがて夫婦には長女（1900）、次女（1902）、三女（1904）が誕生する。  
この時期、藤村は詩から散文に関心を移し、いくつかの習作を発表している。  
\*小説が私の思想（かんがえ）を現すに最も相応しい形だと思ふから小説を書くので…近頃韻文から散文に移つた人が大分ある様ですなえ。皆韻文ではその思想を云ひ現すことが出来なくなつたのでせうよ。（「緑蔭雑話」、

読売新聞1906年4月)

\*ふと、筆筒の上にある手紙を取上げて…読んでみる。御手紙が届いた、この頃の御無沙汰も心よりする訳ではないと書いてあつた。…薄い縁を思ふ度に、枕紙も涙にぬれると書いてあつた。今は死んだとあきらめてくれよ、残るは君を慕ふ心ばかりと書いてあつた。「絶望の初子より、恋しき直樹さまへ」と書いてあつた。

愕然として、愕然といふよりは茫然として、「絶望の初子」と叫んだ。(中略)「待て、お初を離縁しておいて、清乃さんと交際を続けていると思はれるのは厭だ。清乃さんと交際を断つのが第一だ——噫、絶交、絶交」(中略)ああ、新しい家庭も、新しい交際も……すべては空の空に思はれた。…今日までに果たして何が残つたであらう(『緑葉集』所収「水彩画家」より)

\*蒸すやうな八月の景色は眼前に緑葉の嘆きを見せました。(中略)

「噫、私は学問なぞをしなけりやよかつた。——新しい智慧の味さへ知らなかつたら、母の言ふなりにどんな男でも夫にもつて、一生満足していられたらうものを。私は教育なぞを享けなけりやよかつた。——精神を自由なものとなさへ知らなかつたなら、かうして籠を出て飛んで見ようとは思はなかつたらうものを。」(『緑葉集』所収「老嬢」)

1904 (明治37) 33歳 〈日露戦争〉 この頃の信州各地での被差別部落取材がのちに『破戒』に結実する。

9月『藤村詩集』(4詩集を合本したもの)。

\*遂に、新しき詩歌の時は来ぬ。／そはうつくしき曙のごとくなりき。…おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人のつとめなる。／生命は力なり。力は声なり。新しき言葉はすなはち新しき生活なり。われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。…われは今、青春の記念として、かかるおもひでの歌ぐさきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。(序)

1905 (明治38) 34歳 上京。西大久保に住む。三女死去。10月長男誕生。11月『破戒』完成。

1906 (明治39) 35歳 3月25日『破戒』自費出版。好評を得て半月で増刷【初版本】。4月次女、6月長女が死去。10月浅草新片町に移転。この年、明治学院校歌を作詞。

◇藤村は5月生まれの子を「みどり(緑)」と名付けた。そのみどりが6年ほどの短い生涯を閉じた1906年の夏(7月)、神津武宛の手紙に、翌年に出版される短編集の書名を『緑葉集』とすることがはじめて記される。亡児を悼む心情とそのときの出版物の名称の一致を偶然の符合とみるこ



とはできない。そして、同時期に藤村が作詞した明治学院校歌にも「緑葉は香 ひあふれて 青年の思ひを伝ふ 心せよ学びの友よ 新しき時代は待てり」とある。

⇒緑葉は新緑の季節を表す語である。若々しい自然のエネルギーを感じさせる。しかしその季節は、はや春を過ぎて夏である。

春（それは藤村にとって『若菜集』の季節であり、そこにうたわれる「夢」の時間であり、学院校歌にいう「若き生命のあさばらけ」＝命の曙でもある）は過ぎ、無邪気な「春の夢」の時代を「青春の紀（記）念」（上掲『藤村詩集』序）として、ときには苦い思いで振り返らざるを得ない時季である。

⇒『緑葉集』には男女を問わず「夢」にやぶれた若者たちが描かれる。「緑葉の嘆き」（上掲「老嬢」）とは、作中の者たちが捨て去った「春の夢」の残滓を眼前にしての感慨である。藤村は娘たちの墓参をして次のように書く。

＊家から墓地へ通ふ平坦な道路の両側には、すでに新緑も深かった。…彼は自分の心によく似た憂鬱な色を見つけた。（『家』より）

つまり、「緑葉の嘆き」は、愛児の死亡や妻との不和、生活の困窮とその背後にある自らのエゴ（「心猿」）に対する藤村の嘆きでもあった。

⇒そして、藤村は明治学院の「記念樹」の「緑葉」に憩う「青年」（学生達）に「心せよ…新しき時代は待てり」と呼びかける。

しかし、とはいえ、この「新しき時代」の語がかならずしも輝かしい未来を指し示すとはかぎらない。むしろそれが学院を巣立ったのちに「人の世」で「青年」が直面するであろう苦難を含蓄するのだとすれば、「心せよ」の語は重い。

『緑葉集』の序に藤村は「人生は大なる戦場である」と書いている。校歌のさいごを「ああ行けたたかへ雄雄しかれ 眼さめよ起てよ畏るるなかれ」と結ぶのは、藤村の「人の世」を生きることのむずかしさについての実感が導いたことばであると考えてみる。

⇒なお、これについて『新約聖書』コリント前書第十六章十三節の「目を覚し、堅く信仰に立ち、雄雄しく、かつ剛かれ」との類似を説く説もある（『斎藤勇著作集』）。近似した表現をさがすことにどれほどの意味があるのか不明ながら（日露戦争という時局柄、このような勇ましいことばは巷にあふれていたとも考えられる）、『破戒』にも「社会（よのなか）」に容れられない父が丑松に与えたことばとして「行け、戦へ、身を立てよ」と書くように、過酷な私生活の直中にある藤村にとって生きることは自他との戦いであったということを理解すればよいものと思われる（実際に藤村がよく戦い得た人であったかどうかについては後述する）。

＊（ただし、校歌後半の一般的あるいは常識的な解釈は次のようなものであろう）

五行目は一転して、「心せよ」と学びの友に呼びかけ、「新しき時代は待てり」と断定している。

…この響きは、あの「遂に新しき詩歌の時は来たりぬ」[上掲『藤村詩集』序]と言い切った

ところと一致しないだろうか。「詩歌」を「青年」と置きかえることができるだろう。「来たりぬ」でもよいが、将来ある青年に思いを伝えるには「待てり」とするほうが適（ふさ）わしかったのだろう。誰もが遠い未来に希望を抱いて、おのがじし新しい時代の道を切り開いていってほしい願いが込められている。(村上文昭「藤村と明治学院校歌」、『島崎藤村研究』第25号より引用)

1907 (明治38) 36歳 短編集『緑葉集』。次男誕生。

1908 (明治41) 37歳 『春』を朝日新聞に連載、10月刊行。

1909 (明治42) 38歳 『新片町より』。三男誕生。

1910 (明治43) 39歳 『家』読売新聞に連載、翌年刊。四女出産後、妻冬子出血のため死去。〈大逆事件 日韓併合〉

上掲「水彩画家」の一件は、『家』にも取り込まれ、夫三吉、妻お雪の名で描かれる。三吉はお雪の謝罪を容れて和解するが、三吉は心からの愛情をお雪に感じているわけではない。

そして連載中に冬子が死去する。ただし、藤村は妻の死を『家』には書いていない。作品の最終近く、藤村は次のような場面を書く。

\*子供等が寝沈まつた頃、お雪は何か思出したという風で、いつにない調子で、「父さん、私を信じて下さい……ネ……私を信じて下さるでせう……」と夫の腕に顔を埋めて、しまひには忍び泣に泣だした。「何を言出すんだ——今更信じるも信じないもないぢやないか」と三吉は言はうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は黙つて、嬉しく悲しく妻の啜泣きを受けた。(『家』)

この場面は、次作『新生』のなかでも岸本の追憶として繰り返し描かれる。そしてそのなかで藤村は、「十二年間もかかつて漸く自分の妻とほんたうに心の顔を合わせる事が出来た」(『新生』)と書いている。

1912 (明治45) 41歳 『千曲川のスケッチ』。家事手伝いに来ていた姪のこま子と関係(「新生事件」)。こま子は次兄の娘で、姉妹で藤村宅の手伝いに来ていたが、姉が結婚後に藤村との間に肉体関係が生じた。こま子の『悲劇の自伝』によれば1912年5月だという。こま子は妊娠。

1913 (大正2) 42歳 藤村はこま子との関係清算のためバリへ渡航する(3年間フランス滞在)。費用を捻出するために『破戒』『春』『家』などの版權を新潮社に2000円で売却。香港から次兄に手紙を書き、謝罪して事後処理を頼んだ。こま子の産んだ子は子のない夫婦にもらわれた。上掲書の中で、こま子は「あの小説『『新生』: 嶋田注』は殆んど真実を記述している。けれども叔父に都合の悪い場所は可及的に抹殺されている」と書いている。

『桜の実の熟する時』を『文章世界』に連載（1919刊）。

- 1917（大正6） 46歳 帰国。こま子との関係再燃。長兄たちの怒りを買う。
- 1918（大正7） 47歳 『新生』を朝日新聞に連載（1919刊）。こま子は長兄のいる台湾へ。
- 1922（大正11） 51歳 『藤村全集』十二巻を刊行。
- 1928（昭和3） 57歳 加藤静子と再婚。静子は藤村が援助した婦人雑誌『処女地』の編集助手をつとめていた。
- 1929（昭和4） 58歳 『夜明け前』を『中央公論』に連載開始。新潮社『現代長篇小説全集』第六巻『島崎藤村篇』を刊行。
- 1932（昭和7） 61歳 『夜明け前』第一部刊行。
- 1935（昭和10） 64歳 『夜明け前』第二部刊行。日本ペン倶楽部初代会長に就任。
- 1937（昭和12） 66歳 <盧溝橋事件 日中戦争> 麹町に転居。こま子、養育院の報道あり。

こま子は本土に戻り、京都で社会科学研究所の炊事婦をしていたが、社会主義運動者長谷川博と知り合い、一女をもうける。やがて長谷川博は地下に潜伏。こま子は子連れで上京、過労と栄養失調で倒れ、板橋区の養育院に運び込まれる。

\*…長谷川こま子（四四）という一婦人が収容された。病にやつれた見る影もない姿であるが、どことなく気品のある容貌、インテリらしい物腰に同院の係員も謎の収容者として不審がついていたところ、五日になつてこの婦人こそ文壇の巨匠、島崎藤村の代表作『新生』に女主人公「節子」として現れる藤村氏の姪、島崎こま子さんの、それから二十年後のうらぶれの姿であることがわかり、知る人をして暗然たらしめた。（1937年3月6日、東京日日新聞。青木正美『知られざる晩年の島崎藤村』より転載）

世間の同情は姪こま子に集まり、藤村は偽善とエゴのかたまりとして非難される。藤村は夫人（再婚した静子）に見舞金を持たせて病院に行かせたが、夫人は病室に入ることができず、守衛室に預けて帰宅。これがさらに藤村批判を強くした。藤村は心身消耗により病臥、帝国芸術院の会員に推挙されたが辞退を余儀なくされる。

その後、こま子は子どもと練馬で暮らしていたが、晩年にはひとり木曾の妻籠で共産党員としての活動をしていたという。最晩年に再度上京し、中野の都営団地に住み、1969年に没した（享年85）。

- 1939（昭和14） 68歳 新潮社、『定本版藤村文庫』として『破戒』刊行。「身を起すまで」の副題【再刊本】。
- 1941（昭和16） 70歳 大磯に移住。<太平洋戦争（大東亜戦争）>

1942（昭和17）71歳 日本文学報国会が結成され、名誉会員となる。11月、第一回大東亜文学者大会でバンザイの音頭を取とる。

1943（昭和18）72歳 『東方の門』連載中の8月脳溢血で死去。

#### ◆島崎藤村『破戒』

【梗概】瀬川丑松は長野の師範学校を卒業し、飯山の小学校教師を務める24歳の青年。小諸の被差別部落出身（本文：丑松もまた穢多なのである）であるが、父の「隠せ」との命にしたがって、周囲にそれと覺られないよう用心深く暮らしている。一方で、丑松は同じく被差別部落出身で解放運動にたずさわる猪子蓮太郎（長野県飯田市出身の大江磯吉がモデルとされている）を知り、出自を隠さないその生き方に惹かれ、煩悶する（本文：聞けば聞くほど、丑松は蓮太郎の感化を享けて、精神の自由を慕わずにはいられなかったのである。言うべし、言うべし、それが自分の進む道路では有るまいか。こう若々しい生命が丑松を励ますのであった。（略）何故、新平民ばかりが普通の人間の仲間入りが出来ないのであろう。何故、新平民ばかりこの社会に生きながらえる権利が無いのであろう）。

やがて父の不慮の事故死を潮目にして、丑松の素性が露見しそうになる。丑松は蓮太郎に自らの出自を打ち明けようとするが、その矢先、蓮太郎が撲殺されてしまう。丑松は教室で生徒にむかって告白を決意する。

（本文）「皆さんも御存じでしょう」と丑松は噛んで含めるように言った。「この山国に住む人々を分けて見ると、大凡五通りに別れています。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶と、それからまだ外に穢多という階級があります。

…その穢多が皆さんの御家へ行きますと、土間のところに手を突いて、特別の茶碗で食物などを頂戴して、決して敷居から内部へは一歩も入られなかったことを。…御茶は有ましても決して差上げないのが昔からの習慣です。まあ、穢多というものは、それ程卑賤しい階級としてあるのです。…実は、私はその卑賤しい穢多の一人です」…こう言って、生徒の机のところに手を突いて、詫入るように頭を下げた。

「皆さんが御家に御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんに私のことを話して下さい。…今まで隠蔽していたのは全く済まなかった…全く、私は穢多です、調里です、不浄な人間です」…丑松はまだ詫び足りないと思ったか、二歩三歩退却して、「許して下さい」を言いながら板敷の上へ跪いた。…

かつて丑松が目撃した、被差別部落出身者ゆえに郷里を追放された大日向という人物がいた。大日向はアメリカのテキサスに渡り農場経営に成功し、青年の派遣を求めてきた。学校を辞めた丑松はテキサス行きを決断する。

（本文：ああ、ああ、二六時中忘れることの出来なかった苦痛は僅かに胸を離れたのである。

今は鳥のように自由だ。)

◇藤村はのちに「破戒」の主題を「眼醒（めざ）めたものの悲しみ」と表現している。しかし、丑松の眼醒めは結局「社会（よのなか）」との対決に向かわない。その意味で藤村は、眼醒めつつも正義を貫いて生きることが出来ない者の悲しみを書いたのだといってよい。そのような社会との対決の回避を「卑怯」な逃走と受けとるか、逃走する自己を正直に書いた「誠実」な告白と受けとるかで、「破戒」の評価は二分され、同時に藤村という人間への評価・好悪の感情にも結びついている。

「破戒」の丑松はさいごにテキサスへと向かう。その作者藤村は、教え子との恋愛を断念し、教職を辞したあとで「関西漂泊の旅」に出かけ、姪とのあやまちのあとには3年間フランスに滞在する(新生事件)。両者は直接的なものではないにせよ関連しているように思われる。これらは「無責任な逃避行」であろうか、その無責任さについての「誠実な懺悔」であろうか。いずれにせよ、藤村はわかりにくい人である。校歌にいう「人の世」との「戦」いの不透明さについて、藤村研究家の十川信介は次のように述べている。

＊文明開化のさなかに木曾の山中から上京し、キリスト教思想やヨーロッパ文学に共鳴した人間が、強い意思とたゆまぬ努力で桎梏からの解放をめざしながら、逆にそこにからめとられ、その体現者であるかに見られるのはなぜであろうか。

彼は漱石や鷗外ほど透徹した洞察力や鋭敏な自意識を持ち合わせてはいないし、先達・透谷のようなはげしい批判力にも欠けている。その意味では、彼はきわめて通俗的・常識的な精神の持主であり、彼らにくらべて卓越した見識を示したわけでもない。にもかかわらず、彼が読まれなければならない理由もまたそこにあると言ってよい。一方から見れば自己解放のねばり強い努力でもあり、他方から見れば妥協・屈服でもあるような彼の不透明さにこそ、明治以来の平均的な知識人を代表する特質が示されているからである。

その長い文学的生涯を通じて、彼はたえず自分の個に執着し、自分の家系をみつめ続け、最後に『夜明け前』においてわが国の近代化の問題に到達した。観念に走らず、自分の足もとを掘り下げて、ついに「日本」というひろい地点に達したときに、彼にはどのような眺望がひらけていたのだろうか。その道程を辿って行くことは、彼の不透明さや、あえて言えば巨大な俗物性のゆえに、私たち自身の中に生きている「日本的」なものの正と負を探ることと重なり、私たちにとっての「近代」を内側から問いなおすことになるはずである。(『鑑賞日本現代文学④ 島崎藤村』所収、「藤村について」より)

06

---

研究業績

06

## 上野 寛子

### 【論文（共著）】

- ・「文系大学が市民の科学リテラシー向上へ貢献できるのかー4年間の科学イベント実施による検証ー」『カルチュラル』（明治学院大学教養教育センター紀要）、2015年3月掲載予定
- ・「大学生の実態と教員の印象とのギャップを明らかにする新手法ー学生たちが求める要素を取り入れた授業改善に向けてー」（富山国際大学現代社会学部紀要）、2015年3月掲載予定

### 【学会 & ワークショップ】

- ・「学生と真剣に心から楽しめる授業が学生を成長させる」『学生と一緒に考える良い授業ー学生は授業の観客ではない！ー』第4回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム分科会2（大学コンソーシアム八王子）、2014年8月
- ・「学生が考える理想の授業を創作するコツ」『「イマドキの若者」が求める授業の創り方ー主体的な学びを促進させるコツについて考えるー』初年次教育学会第7回大会（帝塚山大学）、2014年9月
- ・第1部「本学学生の思いは？ー学生の思いと教員の思いのギャップ発見ワークショップー」第2部「学生にとって良い授業にするためのエッセンス」2014年度第3回FD研修会（富山国際大学）、2015年3月
- ・「事件は本省の会議室ではなく、現場（授業）で起きている！ー「守・離・破」で臨む大学教養教育難題解決「踊る」ラウンドテーブル・ワークショップー」第21回大学教育研究フォーラム（京都大学）、2015年3月

## 黒川 貞生

### 【論文】

Effects of lower-body plyometric training on athletic performance and muscle-tendon properties. N. Sugisaki, S. Kurokawa, *Journal of Physical Fitness and Sports Medicine*, 3(2): 205-209, 2014

Difference in the Recruitment of Hip and Knee Muscles between Back Squat and Plyometric Squat Jump. N. Sugisaki, S. Kurokawa, J. Okada, H. Kanehisa, *PLOS ONE* 9(6): e101203, 2014

## 張宏波

### 【論文】

1. 張宏波「日中間の歴史認識に横たわる深い溝：花岡『和解』成立直後の中国側の動向から」野添憲治『花岡を忘れるな 耿諄の生涯：中国人強制連行と日本の戦後責任』社会評論社、2014年、240～265頁。
2. 張宏波「本学の教学改革と中国語教育の方向性：他大学の先行事例に学びつつ」『カルチュラル』第9巻、2015年3月掲載予定。
3. 張宏波「歴史的文脈の再導入によって見えてくる戦後中国の対日友好外交——商船三井の船舶差し押さえ騒動を事例に——」『PRIME』（明治学院大学国際平和研究所）第38号、2015年3月掲載予定。

## Grimes-MacLellan, Dawn

### 【論文】

Skype in the EFL classroom: What's not said... *Journal of Modern Education Review*, Forthcoming March 2015.

### 【学会発表】

Skype in the EFL classroom: What is not said... Asia-Pacific Teaching Professor Conference (Tokyo). March 29, 2014.

Multiple voices on Skype in the EFL classroom. JALT2014: Conversations Across Borders (Tsukuba). November 24, 2014.

The role of anthropologists in campus internationalization. American Anthropological Association 113<sup>th</sup> Annual Meeting (Washington, D.C., USA). December 7, 2014.

Cultural consultants in the classroom: Harnessing student mobility for intercultural learning. Hawaii International Conference on Education (Honolulu, HI, USA). January 5, 2015.

### 【その他】

Review of *Live Your Dream: The Taylor Anderson Story*. Regge Life, dir. (Global Film Network,



2012). *Asian Educational Media Services, News and Reviews* (Issue #52, Spring 2014), [http://www.aems.illinois.edu/publications/enewsletters/newsandreviews\\_spring2014.html#LETTER.BLOCK35](http://www.aems.illinois.edu/publications/enewsletters/newsandreviews_spring2014.html#LETTER.BLOCK35)

## Varden, J. K.

『Leveraging technology in the Japanese university EFL General Education Classroom』カルチャー  
ル（明治学院大学教養教育センター紀要）9(1), 2015年3月

## 編集後記

2014年度の年報『SYNTHESIS』が発刊の運びとなった。ご寄稿いただいた諸兄姉に深謝申し上げます。

本年度は、横浜校舎における公開講座の当番部局であった。05はその報告記事である。収録の講義資料を通読しても、その充実ぶりをうかがうことができる。講師各位はもちろんのこと、熱心に聴講してくださった受講者の皆様にも御礼を申し上げたい。

02の月例研究報告は、前年度に休暇を取得した同僚にその成果を発表していただいた。2015年度には数名の新任者をお迎えすることになる。研究テーマの報告を聞くことで、所属員の視野が広がることであろう。多くの教職員、学生の出席を期待したい。

各種の講座やランゲージラウンジ、研究プロジェクトの報告も、年次ごとに積み重なれば私たちの足跡になる。報告書を作成し、またそれを読むことで完結するのではなく、次の活動に向けて新しい可能性や改善すべき点を見い出していきたい。

文責：嶋田彩司

2015年3月31日 発行

---

## 明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 SYNTHESIS 2014

---

編集代表 嶋田 彩司

発行者 嶋田 彩司

挿画 土方 淳代

発行 明治学院大学 教養教育センター附属研究所  
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518  
電話 045-863-2067

印刷 相和印刷株式会社

---

Printed in Japan